コンプレックス♪

朝霧零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コンプレックス♪

【Ｎコード】
Ｎ３４９２Ｎ

【作者名】
朝霧零

【あらすじ】
超重度のブラコンの姉と重度のシスコンの弟が織り成す日常。
学校、家など場所を問わず暴走する姉。
そんな姉から理性を保てるのか！？
電波系？ギャグ？シリアス？…そんなもの知りません！ただイチャイチャするだけです！
この物語は頭が可哀想な作者の妄想１２０％でできてます。

プロローグ～始まりの日～（前書き）

この物語はおバカな話しになっています。
十分にお気をつけてお読みください。
書いてる作者でさえバカだなと思いながらかいてるぐらいなので……
だが、後悔も反省もしてなかったりする！

プロローグ～始まりの日～

桜が舞っていた。
季節は春。
快晴に近い天気のなか桜並木を歩く。
４月の陽気に当てられた新入生達が、新しい学び舎に入っていく。
俺もその内の１人だ。
桜に気をとられつつ、気がつけばもう校門の前だ。
新しい学校。
新しく出会う人たち。

「……」

期待と不安で校舎に向う。
……？
入学式早々に全力で走ってくる人がいる。
女の子のようだ。
スカートが翻るのもまったく気にしてない。
それにすごく見覚えのある女の子だ。

「しんく～ん！　信君！　信君♪　し～ん君！♪」

「わわっ！　ゆ、雪姉！？　ど、どうしたの？」

「どうしたじゃないよ！　寂しかったんだから！」

俺の名前を呼ぶなり飛びつかれた。
姉の「雪」だ。
俺は背が高いほうではなく、雪姉の方が少し高い。

だから今のように飛びつかれると顔が胸に埋まる。
いくら姉弟でも、女の子の柔らかさに少しクラッとくる。

「さ、寂しいって…」

「１０分前まで一緒だったよ」

「何で！？　１０分”も”離れてたんだよ！？」

目の端に涙が溜まってる。
雪姉は本当に寂しかったみたいだ。
でも、今日ここまで登校するのも一緒だった。
それを、

「学校の玄関で信君をお出迎えしてあげる♪」

って言って途中で先に学校に行ったのも雪姉だ。
それからゆっくり歩きすぎたのもあるけど…
そこまで寂しくさせちゃったかな？

「一人で大丈夫だった？　いじめられてない？」

「いじめも何もまだ誰とも話してないよ」

「も、もしかして無視されてるの！？　ごめんね、辛かったよね？」

「でも心配しないで！　これからはお姉ちゃんがず～と一緒にいるからね！」

そんなに強く抱きしめられると顔が胸に。

それに、無視って…。
まだ教室にも入っていないのに…。
というか、だいぶ注目を集めているからこの場を立ち去りたい。
「一緒の教室で勉強して、一緒にご飯食べて一緒に帰って、一緒に寝るの！」
「これで信君も虐められないし、寂しくないよね？」
「確かに寂しくないけど…」
それ以前の問題の気が……。
他の人は期待と不安でこの門をくぐったのだろう…。
けど俺は姉の溺愛（期待）と姉の暴走（不安）でこの門をくぐる。
それでも、これからの新しい学園生活…
俺の隣で、満面の笑みを浮かべる雪姉と一緒に歩いていけるのが嬉しい思ってしまう俺は、きっとシスコンなのだろう。
でも、１つだけ言いたい。
俺より…
雪姉のほうがず～～～っとブラコンだということを。
それも、自他共に認めるほどの…。

プロローグ～始まりの日～（後書き）

誤字脱字等ございましたらご報告お願いします。

一日目～前編～（前書き）

入学初日の朝から昼休みまでです。

一日目～前編～

そう、雪姉はブラコンだ。
しかし、雪姉が言うには、

「私、ブラコンじゃないよ？　私は”シンコン”……信君コンプレックスなんだよ！　シンコン…いい響きだよね！？　だってだって！　新婚だよ！　キャー！！！　もうお姉ちゃん幸せすぎて困っちゃうよ！」

らしい。
これを街中で白昼堂々と言い切ってくれた。
おかげで一夜にして俺達は有名人だ。
それだけじゃない。
雪姉は身内というのを除いても可愛い。
だから中学の頃から何人にも告白されていた。
まぁ、そいつらは決まって、

「信君以外に興味ないから嫌！」

ってフラれてたけど。
他にも爆弾発言連発されることも多々と…。

「信君、信君って、信って奴は弟だろ？　弟なんてほっといて俺と付き合ってよ！」

「弟だから何よ！　国に認められなくても結婚できなくても、子供はできるんだから！！」

だそうだ。
いいのかそれ？
毎回同じ様なやり取りのために今では告白も少なくなったらしいが…。
少なくなっただけだでなくなってないんだよな。
うん、今度それについて詳しく調べておかなくちゃ…。
雪姉を変な奴には渡せないしね。
まぁそれはいいとして、そうなると俺も有名人になるのは当り前だろう。
雪姉と別れ、教室に向かったが…。
新しい学校の新しい教室の新しい人達が皆して「あれが雪先輩の弟らしいよ」って会話をしている。
有名人の気持ちが少し分かった気がする。
言われるのは嫌いじゃないが…少し恥ずかしい。
とりあえず、空いてる席、窓際がいいかも…。
初日だし席とか決まってないようだしね。
隣に誰かいるけどそこに座らせてもらおう。

「これから1年間よろしくね」

うん。
雪姉も言ってたけど、最初の挨拶は大事だよね。

「うん！　よろしくね！　信君！♪　あ、でも～1年なんて言わないで、これからず～～～～と一緒がいいなぁ～」

なぜ雪姉（あなた）がここにいる！？
ついさっき別れた時に、妙にすんなりと別れたことに疑問を持つべきだったか！？

「どうしたの信君？　緊張してるの？　大丈夫だよ～。　お姉ちゃんがついてるから！」

うん、それならすごく頼もしい…じゃなくて！
雪姉は1年生ではなく2年生だから！
しかもなんで俺よりこの教室に馴染んでいるんですか！？

「こら～！　雪！　1年生のクラスで何やってんのよ！」

「あっ！？　桜ちゃん！　信君に会いに来たの？　でもダメだよ！
信君は私のなんだから！」

「何言ってんのよ！　こんな可愛い子を独り占めなんてさせないわよ！……じゃなくて！　下級生のクラスで何やってんのよ！」

「何って？　信君と一緒にいるだけだよ？」

「だ・か・ら！　あんたのクラスはこの下！　わかる？　し・た！
2年でしょ！　1年の教室に馴染まないの！」

「桜こそ何言ってるのよ！　信君の隣が私の居場所なのよ！」

「学年違うでしょ！」

「そんなの関係ないもん！」

「雪姉、やっぱり自分のクラスに戻ったほうがいいよ」

「でもでも、50分も離れちゃうんだよ？」

「あんた、休み時間ごとに来るつもり！？」
「雪姉…雪姉が怒られるの嫌だな……」
「…信君……うん！　わかった！　お姉ちゃん頑張るよ！」
「私、無視されてる！？」
「信くん、充電していい？　ぎゅって…して……」
「ゆ、雪姉！？」
「ねぇ、お願い…５０分がんばれるように、ね？　ぎゅってして？」
「…う、うん。わかった」
「信く～ん…あったかい」
「……いいなぁ～雪。私もされたいなぁ」
桜さん、雪姉を止めに来たはずでは？
ミイラ取りがミイラになった？
まぁ雪姉を抱きしめてる俺が言える立場じゃないけどね。
それにしても雪姉は相変わらず抱き心地がいい…。
なんていうか俺仕様？
「…いつまで抱き合ってるのよっ！　早く私と代わりなさいよ！」
…あれ？
本当にミイラになってる？

「何言ってるの？　信君は私のなの！」

「いいじゃない！　少しくらい！」

「だめ！　それにもう時間もないもん！　信君に迷惑でしょ！」

「そう言いつつ雪はまだ抱き合ってるじゃない！」

「私は良いの！」

「なんでよ？」

「私は信君の所有物だもん！　もう身も心も信君のものだもん！」

”きーんこーんかーんこーん”

”ガラッ”

「みなさ～ん、席に座ってくださいね。　あら？　2人は上級生…雪さんと桜さんね。教室に戻りなさい。　信君のお世話は休み時間に、ね？」

「は～い。信君、頑張ってね？　何かあったらすぐにお姉ちゃん呼ぶんだよ？」

「ほら、雪早く教室戻るわよ」

「うん。雪姉も桜さんも頑張ってね」

さすがに先生の言うことは聞くか。
ふぅ、これからはこれが日常になるんだろうなぁ～。
嬉しいような恥ずかしいような。

「まさか、初日から噂の姉弟が見れるなんて、先生ビックリだわ～」

…先生の間でも噂になってたのか。
はぁ～。
有名人っていうより動物園のパンダだな。
…今日もいい天気だ。

……んっ？
……何なんだろう。
…何かに突かれてるような？

「…ん…だれ？」

「あ！　信君、起しちゃった？」

どうやら俺は授業中（初日だから授業と呼べるようなものは無かったのだが）に寝てしまったようだ。

「ん、おはよう」

「おはよう、信君」

目の前に雪姉の顔。
どうやら雪姉が寝ている俺の頬を突いていたらしい。

「信君信君、はい」
「はい？」
はいってなんだろう？
目を瞑って口を突き出してる？
…何がしたいんだ？
「信君？　まだ？」
「えっ？　まだって？」
「おはようの、キッス」
「…はっ？」
「こ～んの～バカ！！！　雪あんたねぇ！　こんな人前で何考えてんのよ！　うらやましいでしょ！」
…桜さんいたんだ。
ていうか、そこ怒るとこじゃないし。
「何よ！　いくら親友でも私と信君の時間を邪魔したら許さないよ！　せっかく信君もしてくれそうなのに！」
いや、するつもりは無いのですが…。
「あんたは毎日家でイチャついてるんでしょ！　学校ぐらい私に譲りなさいよ！」

「人の弟に手出ししないでよ！」
雪姉、言いながら人を抱き締めないで欲しいのだが。
「いいじゃない！　あんたこそ弟に何手出ししてんのよ！」
「私と信君ならいいの！」
「なら私ともいいじゃない！」
…話の論点がずれてる。
でも、指摘すると色々と面倒になるし…。
桜さんって年下好きだっけ？
昔雪姉が注意しろって言ってたような気がするけど…。
「桜さん、俺でいいの？」
「えっ？」
「そうよ、そうよ。桜、人の信君を取らないで！！」
「何いってんのよ！　いい！　信はねぇ、容姿は可愛い系で甘え上手で優しいのよ！　ほら私のストライクゾーンじゃない！」
「当たり前でしょ！　私の信君なんだから！」
「…すごく過大評価な気がする。それに甘え上手かな？」
「今だってさりげなく雪に甘えてるじゃない！」

「いや、これは雪姉が」

「信からも抱きしめてるのに？」

「ふふ～ん。いいでしょ～！　私と信君は相思相愛なんだから！幸せな家庭も秒読みなんだよ！」

え！？

そこまで発展するの！？

「ずるいわ！　私もイチャイチャしたい！」

「だめ！　信君は私とするの！」

この二人の間に俺の意見は通るのだろうか？

2，3時間目の休み時間も雪姉と桜さんが来て嵐のように帰って行った。

たぶん、この数時間だけでもこの学校に一番名前が知れ渡ったであろう。

元から知れ渡ってたのもあるだろうけどね。

そして昼休み、どのクラスの窓からも見える中庭のど真ん中で、ランチマットを広げて座っている三人組。

そう、俺たちだ。

何をしてるかって？

そんなの決まってる。

「はい、信君♪　あ～ん」

「あ、あ～ん」

誰の目もない家でやるのは良いけど、こんなに注目されるとすごく恥ずかしい。

「雪ばっかりずるいわよ！　信、こっちもあ～ん」

さらに桜さんまで対抗意識を燃やしてくるし…。

人目がなければ天国なのに。

「信君信君！　私にも～あ～ん、して欲しいなぁ～？」

「雪姉…う、うん。いいよ」

雪姉の上目使いは、俺的にはクリーンヒットだ。

「くっ…雪、やるわねぇ。でも、私のショタ魂も負けないわよ！」

「俺ショタって歳でもないんだけど…」

「ふん。いくら桜でも私が信君を思う気持ちに比べれば天と地の差があるんだから！」

「どうだかね。雪はどうだかわからないけど、私は信にだったら身も心も全て捧げられるわよ」

「そんな程度なの？　桜、それじゃ私の勝ちだよ」

「えっ！？」

…なにか嫌な予感……。

「私はもう信君に全部あげちゃったもん♪」

「えっ！！！」

「！？！？」

ななな何言ってるのかな！

全部あげちゃった？　何を？　誰に？　へっ？

…もしかしなくても俺って今ヤバイ？

あっ…周りからの殺気の乗った視線が…。

何より桜さんの方を向けない！

やべぇ、怖！！

「し～ん～！！！　いったいどういうことよ！！　事と次第によっては私にも同じことしてもらうわよ！！！」

「ここでは無理ですよ！？」

「そこにツッコムの！？」

外野うるさい。

何か間違えた？

「さぁ！　雪、信！　キリキリ吐いてもらうわよ！」

「な～に～？　桜、そんなに羨ましいの？」

雪姉！
それは火に油だよ！

「当り前よ！　こんな可愛い子とだなんて！」

「じゃあ、教えてあげるよ～。ねっ信君」

俺も教えてもらう側なんですけど……。

「信君とは～、少し前に、一緒にお風呂入って、一緒にお布団で寝て～、将来まで誓い合ったんだよ！　羨ましいでしょ！♪」

「おおおおお、おふろ！？　ねる！？……」

さ、桜さんが倒れた！？
って気にしてる場合じゃない！

「ゆゆゆゆゆ、雪姉！　何いってるんだよ！」

「？　何って？　全部本当だし、隠すことじゃないでしょ？」

「いやいやいやいや！　隠すことだし、少し前って１０年前の話でしょう！？」

「うん、そうだよ？　何かまずかったかな？　あっ！　分かった！
信君、照れてるんでしょ？　可愛いなぁ～。　信君信君、ギュってしていい？」

言いながらもうすでに抱きついてるから！
というより、１０年前を少しと言わないでくれ…。
精神的にも肉体的にも客観的にも全然違うから……。
ほら、１０年前って聞いた途端周りが興味を失ったよ…。

「…小さい頃の信…ヤバイわ。ヤバすぎる。もうこれは（―――自主規制―――）しかないわね」

１人はさらに興奮してるけど…まぁ例外でしょ？

一日目～後編～（前書き）

昼休みから夜です。

一日目～後編～

昼休みも終わり、雪姉達の所為で忘れそうだが、今日は高校入っての初日。
1年生は午前だけで午後はない。
まぁ、本来なら昼休みもないのだが。
ないのだが…今俺は図書室で時間を潰している。
もうすぐ6時間目も終わるはずだ。
主に雪姉のために待っているのだが…。

「信君信君！　今日は一緒に帰ろうね！」

「は？　何いってんの？」

「どういう意味よ、桜！」

「雪姉、今日は1年は午前授業だよ」

「……あっ！？」

「忘れてたのね」

「うん……なら早退する！」

「ダメよ」

「何で！？　どうせ授業らしい授業なんてないんだからいいじゃな

い！」

「だ、駄目だよ雪姉！　ちゃんと授業に出ないと」

「でもでもでも～。信君と一緒に帰れる～って楽しみにしてたんだよ？　それでも駄目なの？　信君と一緒に帰りたいよ～」

「だめよ、雪」

「むぅ～、桜には関係ないもん！」

「はぁ～。　そんなに一緒に帰りたいなら待ってて貰えば良いでしょ？」

「ダメだよ、信君に迷惑かかっちゃうもん。　そんなことさせられないよ」

「いいよ雪姉。待ってるよ」

「えっ！？　信君無理しないで良いよ？　時間掛かっちゃうし。私の事は気にしないでいいから、ね？　信君のしたいことが私のしたいことなんだから」

「うん、だから待ってる。俺も雪姉と帰りたいし」

「し、信君！　うん！　一緒に帰ろうね！　授業終わったらすぐに迎えに行から」

今日一番の笑顔。

照れてる頬が赤いのがまたいい！

しかも、目がちょっと潤んでるのもポイントが高い！
くそ！
俺がもう少し身長があれば完璧な上目遣いなのに！
今の俺と雪姉だと雪姉の方が少し高いくらいだからなぁ～。
身長欲しい……。

と、まぁこんな事があったのだが。
あの雪姉の表情は俺的歴代ランキングに匹敵する可愛さじゃないか？
まぁそんな事はいいか。
それよりもうすぐ二時間ぐらい待ってるな。
まだ来ないのかな？
午前中に寝てたからまったく眠気がこない…暇だ・・・・・・・・・。

「・・・・・・・・・はぁ～」

暇だ～。
しかも図書室に一人って結構寂しいし。
読書って言っても、何読めばいいのか分からないし。

「どうしたの？」

「ん～ひまだし、図書館に一人って寂しいなぁと」

「じゃあ、ぎゅってしてあげる！♪」

「は？　へ！？　ゆ、雪姉いつの間に後ろに！？」

背中に温もりと柔らかい感触が！！

「ん～と…5分ぐらい前から？」

「そ、それなら声かけてくれればいいのに」

「ごめんね～。黄昏てる信君がカッコよくて♪」

「て、照れるよ」

「しんく～ん。あったかいよ～」

「ゆ、雪姉？　もうそろそろ離してほしいなぁ～」

「もうちょっと、だめ？」

うぅ、そんな寂しそうな顔で言うなんて反則だよ。

「もうちょっとね」

俺の理性持つのかな？

「うん！♪」

雪姉の顔がまぶしすぎるよ。

「うん！　充電完了だよ！　帰ろっか？　信君」

「そうだね。行こうか」

「うん！　信君と一緒に帰るよ♪」

小学校も中学校もずっと一緒に帰っていた所為か、手を繋いで帰ることに抵抗がない。
抵抗はないが照れはある。

「ねぇねぇ信君？　今日の晩御飯何食べたい？」

「ん～と…雪姉に任せるよ。雪姉のご飯は何食べても美味しいから」

「も～、信君てば。そんな嬉しい事言ってもデザートに私しか出ないよ～♪」

「いや、でなくて良いから！　ちょ、ちょっと雪姉！？　俺の腕、胸に埋まってるから！？」

「埋めてるも～ん♪　お姉ちゃんと腕組めて嬉しい？」

「う、嬉しいけど」

「けど？」

…いや、これは役得だよね？
せっかくだしこのままにしておこうかな。

「何でもないよ。雪姉と帰れて嬉しいだけ」

「本当！♪　私もすごく嬉しいよ♪♪」

「やっぱり雪姉は笑顔が一番だね」

「信君♪　もう～信君てば天才だよ♪　お姉ちゃんをこんなに幸せにしてどうするの～♪」

やっぱり雪姉は笑顔が似合ってる。

「ただいま」

「おかえり～信君！　ご飯にする《口移しにする》？　お風呂にする《一緒に入る》？　それとも寝ちゃう《わたし》？」

「…なんだろう？　どれも選んではいけない気がするのに全部選びたくなるこの気持ち……」

「現実は常に想定の斜め上を行くんだよ」

食われる！？

「ゆ、雪姉？」

戦慄してる間に雪姉に抱きしめられてるし！

動き見えなかったよ！？

しかも顔が雪姉の胸に埋まってる。

「信君、どうする？」

温もりに包まれながら聞こえる声は雪姉のとろけるような甘い声。
はっきり言って理性がヤバイ。
普段より雪姉が可愛く魅力的に見えてしまう。
あぁ～理性が崩壊していくのが分かる。

「雪…お姉ちゃん……」

ううぅ～。
理性が警告を鳴らしてるのは分かっているのに、分かっていても止まりそうもない。

「信君。可愛い～♪」

俺の声に反応してか抱きしめる力が少し強くなった。
その分俺の理性はなくなっていく。
きっと今の俺の理性はミジンコ以下なんじゃないか？
その理性で耐えてるんだから俺の理性はだいぶ強力だったんだな～。
雪姉、柔らか…ダメだ！
ここでそれを考えた瞬間俺は暴走する自信があるぞ！
何か状況を壊してくれる何かがないのか？

「しん…くん。信君からもギュって…して？」

「……」

もうだめです。
無理です。
限界です。
理性さんさようなら。
僕は今日、大人の階段を”くぅ～”…。

「あれ？　今の信君のおなか？」
「～～～。そうです」
お腹が鳴って我に返ったのは良いけど、恥ずかしい！
「ご、ごめんね！　すぐにご飯作るね！」
「…お願いします」
”チュっ”
一瞬の隙をみて頬にキスをされてしまった。
これって傍から見たら新婚家庭なんだろうな～。
って、まだ思考がすこしおかしい。
とりあえず制服着替えて雪姉の監視しないと。

「雪姉、今日は何作ってるの？」
台所にエプロン姿で立つ雪姉は可愛い。
が、しかし俺はそれを眺めに来たわけじゃない。
楽しみの一つではあるけど……
「今日はオムライスだよ」
「そっか～。ところで左手に持ってるものって何？」
「これ？　これは～惚れ薬だよ」

「……入れた？」

「まだだよ？」

よかった！
間に合った！
雪姉はいつも料理に変なものを混入させるから監視を怠れない。
しかしやっぱり制服エプロン姿の雪姉が可愛い。

「お姉ちゃん。入れないで欲しいな～」

「え～、でも、これ入れると美味しくなるんだよ？」

「おね～ちゃん、入れないで？　お願い」

ここで重要なのは甘えた声と上目使い！
俺はやるよりやられるほうが好きなんだけどな。

「うん！　わかった。今日は”超！！強力！スッポンエキス”だけにするね」

…とき既に遅かった。

目の前に並べられていく皿。
美味そうなオムライスが実に胃袋を刺激する。
刺激するのだが、スッポンが入ってるんだよね…。
スッポンぐらいと思っていても普段から色々と溜まってる俺としたら厳しいものがある。
それに”超！！強力！”らしいし。

これ食って大丈夫なのか俺？

「信君早く座ってご飯食べよ？」

「そ、そうだね」

「いただきま～す」

「い、いただきます」

「はい、あ～ん♪」

いつもの事だからくるとは思っていたけど、くそ～1週間ぶりの危険物混入ご飯だ。

最近は防げてたから油断した。

防御率は4割ってとこか。

はぁ、今日はまだ軽い方だからよかったか。

「信君？　はい♪　あ～ん♪」

…腹を決めるしかないか。

「あ、あ～ん」

「どう？　おいしい？」

「うん。おいしいよ」

本当に美味しいんだよな～。

どんなに変なもの混ぜても美味しいってのは結構すごいよな。

「じゃあ～いっぱい食べてね！　あっ！　体が熱くなっても私はいつでもＯＫ！　だよ！」

「何が！？」

「し～んくん♪　ふふふふ～」

もしかしなくても結構ピンチ！？
そういえば少し体が熱いような…。
いやいやいや！
きっと気のせいだ！
そうに決まってる！
でも…雪姉だったらいいかも。
って！　思考がおかしい！？

「ふふ。いっぱい食べてね♪　信君♪」

こういうのって袋のネズミっていうんだっけ？
超！！強力！…どこまで強力なんだろ？

うう～体が熱い。
血液が沸騰している感じ。
なんとか熱を冷まさないと。
雪姉がお風呂沸かしてる間に熱冷ませないかなと思ったけど、少しスッポンを嘗めてた。
ぜんぜん冷める気配がない。
むしろ余計熱い。

「信君、お風呂沸けたよ」

「今日は雪姉が先で良いよ」

正直今入ると湯あたりしそうだし。
スッポンって以外に強力だったんだね。
知らなかったよ…。
これは強力というより暴力だよ…。

「……。うん、わかった。待っててね信君！」

ん？
今の間はなんだ？
それに待っててって何を？
まぁいいか、今のうちに熱を冷まさないと。
それにしても最近の雪姉は少し暴走のし過ぎのような気がする。
少し前まではここまでべったりじゃなかった様な？
いや、あまり変わってないか？
ん～、どことなく焦ってる感じがするんだけど。
そういえばもう少しで雪姉の誕生日だよな～。
もしかしたら誕生日プレゼントを奮発してもらおうと？
いやいや、雪姉はそういった打算的な事をする性格じゃないし…。
でも、プレゼントどうしようかなぁ。
雪姉の欲しいものって何だろう？
……俺？
ははは、なに馬鹿な事を考えてんだ俺ってば。
……でも、外れてる気がしないのは気のせいだよね？
俺ってば以外に自意識過剰かも。
そうだよね。
ただ自意識過剰なだけだよね。

でも、本当に俺をプレゼントしたら雪姉…どうすんだろう？
愛でる？
げふっ！！
り、リアルに想像してしまった。
あ～やばい。
体が冷めない。
少し前の俺…何が今日は軽めだよ……。
変な妄想が頭を離れない。
そういえば、今って雪姉がお風呂に入ってるんだよな。
雪姉がお風呂か…。

「しんく～ん。あがったよ～」

！！！
び、ビックリした！

「信君、信君！　見て見て～」

「な、何？」

「じゃじゃ～ん！　信君悩殺ビキニ～！」

「！！！　なななななにしてるんだよ雪姉！」

ななななな何でタオルしか着てないの！？
しかも露出高すぎだよ！
何！？
何なの！？
上と下しかタオルで隠してないって！
はっ！？

ビキニってそういうこと！？
そうなの！？
そうなのか！？

「何って？　夏を先取り？」

「俺に聞くな～！　ていうかまだ４月だよ！」

「どう？　信君？　似合ってる？」

「似合ってる！　似合ってるから早く服着て！」

「あ！　落ちちゃった！」

「なに～！！！」

「実は二重構造で～す」

「謀ったな！」

「ふふ～。信君はお姉ちゃんに興味深々だね！♪」

「ぐは！」

やっぱり雪姉は暴走のしすぎだ。
……それにしても正直見たかった。
男ならしょうがないよね？
年頃の男の子にする方が悪いよね？

「し～ん君♪」

「！！！　お風呂入ってくる！」

戦略的撤退も生き残るには必要なんだよ！
何がって？
そんなの理性に決まってる！
今の俺の理性に勝ち目などない！
スッポンとビキニ…なんて強力なタッグなんだ！

…ふぅ～。
お風呂に入って落ち着けたけどのぼせそうだ。
熱を冷ますはずが余計に熱くさせられたからなぁ。
この様子だともう１つ暴走があるかも。
リビングにもキッチンにもいないって事は俺の部屋にいるんだろうなぁ。
あの雪姉が自分の部屋に篭るなんて考えられないし。
とりあえず部屋に行くか。
べ、別に楽しみになんかしてないよ？

”がちゃっ”

「雪ね…え？」

布団が盛り上がってる？
いや、それは問題じゃない。
いつもの事だ。
でも・・・でも・・・
布団の中から少しだけ出ているものはいったい何？
いやいや、本当は分かっているさ。

分かっているけど…どうして…。
猫耳なの！？

「信君？　早くおいで？」

くっ！
布団から少しだけ顔を出して見詰めるなんて！
しかも恥ずかしそうに！？
なんですかそれ！？
誘ってる！？
お、落ち着け俺！
た、確かに今の雪姉はいつもより可愛いけど暴走するほどじゃない！

「な、何で猫耳なのかな？」

「～～～。　信君に…喜んで欲しくて……どう？」

あ、あの雪姉がしおらしくしてるなんて！！
だ、誰だよ！
雪姉にこんな高等技術教えたのは！？
くそ！
シスコンだって自覚はあるけどこれは反則だろ！！

「信君…似合ってない？」

「そんな事ない！」

「信君♪　そんなに力いっぱい否定するなんて…嬉しい♪」

ガー！！！

何なんだよ！！！
最後の最後に俺を悩殺するなんて！！！
獣か！？
獣になれってことか！？
そうか！
だから猫なんだな！
発情期の猫になれってことなんだな！
いいだろう！
理性よさらば！！

「雪ね…」

「信君」

「え…何？」

「寝よ？　お姉ちゃん眠くなっちゃった」

「へっ？」

「しん…くん。おやすみ……」

「……」

……これが噂に名高い”蛇の生殺し”ってやつか。
何事にも打ち破れない鋼鉄の理性が欲しい……。

「……眠れない」

口に出しても眠れるわけないか。
今何時くらいだろう？
少なくても3時は回ったんじゃないか？
はぁ、こんな状況で眠れる人は居るのかな？
いくら姉とはいえ可愛い女性に抱きつかれたまま眠れる奴はあっちの毛がある奴だけなんじゃないか？
いや、そう考える時点で今日はおかしいのか。
はぁ、もう慣れたと思ったんだけどな。
いつもならこんなにドキドキしないのに…今日はどうしたんだ？
スッポン？
いやいや、流石のスッポンもそこまで強力じゃないだろう？
なら？
…！
猫耳か！？
猫耳なのか！？
ま、まさか俺にそんな属性が合ったなんて！！
って、そんなわけあるか！
いつもと違う雪姉を見たからに決まってる！
俺の属性は雪姉だ！
…て、それは重度のシスコンだから！！
……自分で自分にツッコンでもつまらん。

「……しん…くん～♪……」

！！！
寝言か～。
はぁ～さっきから寝息が首筋に当たってこそばゆいな。
それに横を向けば雪姉の唇がすぐ近くにあるし。
はぁ～。

「いっそうのこと寝なきゃいいのか」

「んっ……しん…くん？　ねむれないの？」

「あっ。ごめんね」

「ううん。　でも～ねないと～あした～つらいよ～？」

眠気眼で舌足らずに話す雪姉って可愛いな。

「そうだ～。おねえちゃんが～ねむれるまで～ぎゅ～ってしてあげる～」

なんかこう保護欲をかきたてられる。

「ぎゅ～」

そうそう、こんな風に抱きしめてあげたくなる…って！？

「ゆ、雪姉！？　は、はなして！　って寝てる！？　ちょ、雪姉！」

「く～」

「く～じゃないから～！　って、力緩めて！　胸に抱きしめられたら呼吸できないから！」

「よるは…しずかにだよ～」

「むが～」

「しん、くん……」

うぅ〜、早く朝が来ないかな。

〜〜雪視点〜〜

あのスッポン、本当に強力だったんだ。
信君眠れなくなっちゃたみたいだし。
ごめんね、信君。
でも、こんなに無防備にしてるのに襲ってくれないのが悪いんだから！
でもでも、眠れないって事は意識してくれてるんだよね？
信君、気がついてるのかな？
こうやって抱きついてる…ううん。
私が信君のベッドに入ってからずっと心臓がドキドキしてること。
気づいてほしいな。
でも、気づかれちゃうと恥ずかしい。
抱きついたりするの本当は私も恥ずかしいんだよ。
手を繋いで帰るときも本当はすごくドキドキしてる。
きっと気づいてないんだろうな。
お風呂上りと猫耳はやりすぎちゃったかな？
信君、少し不思議がってた。
焦ってるのバレちゃったかな？
信君が他の人にとられないか私いつも不安なんだよ？
信君って実はすごい人気があるんだよ？
信君がいるからって同じ高校に来た子もいるんだから。
不安だよ。
私より可愛い子はいっぱい居る。
私より綺麗な子もいっぱい居る。
私より気が利く子もいっぱい居る。

私にあるのは姉と言う立場だけ。
姉っていうだけで信君を縛ってる。
不安だな。

「しん、くん……」

あっ！
…ぎゅってしてくれた♪
気づいてくれたのかな？
信君って私が落ち込んでたり不安になるといつもぎゅってしてくれる。
すごく優しいよ。
私には勿体無いぐらい優しい。
でも、その優しさを誰にも渡したくない。
私って独占欲強すぎるかな？
強すぎるんだろうな。
でも、止められない。
好きだから。
好きって言葉じゃ伝えられないほど好きだから。
届いてるかな？
伝わってるかな？
私の想いを受け取ってくれてるかな？
ねぇ…わかる？
私がどれだけ想ってるか。
いつか届けばいいな。
うぅん。
いつかなんて寂しいよ。
今すぐにでも届いてほしいよ。
何回好きって言えば届くのかな。
何回抱きしめれば伝わるのかな。

ねぇ？
信君。
好き。
大好き。

一日目～後編～（後書き）

最後に雪の語りを入れて見たのですがどうでしょうか？
ただ暴走してるだけの姉ではないというのを見せたかったのですが
……

誤字脱字や感想などございましたらお気軽に書いていただければ幸いです。

2日目～前編～（前書き）

相変わらずの頭の悪い妄想物語。
お読みになる方は十分に気をつけてお読みください。

2日目～前編～

結局昨日は眠れなかった…。
時間的にはもうそろそろ起きなきゃいけないかな？

「雪姉、雪姉。朝だよ」

昨日の夜からずっと胸に抱きしめられたままだから少し声がくぐもる。
ずっと同じ姿勢で疲れないのか？

「雪姉、朝だよ。おきて」

「んっ……」

反応があった。
起きたかな？

「にゃ～しんくんだ～あったかいよ～。…くぅ～」

「雪姉寝ちゃダメだ…うぐ」

む、胸で息が！

「ん～！（雪姉！）　ん、ん～！（い、息が！）」

「しんく～ん♪　くすぐったい～♪　にゃ～」

「ん～！？（にゃ～って何！？）　んん～！（雪姉起きて！）」

今日の雪姉、いつもより手ごわい！
いつもなら一声かければ起きるのに！
「ねこは～きもちのいいところで～ねるんだにゃ～」
猫耳！
猫耳の所為なのか！？
「しんく～ん、きもちいいにゃ～…すぅ～」
「ん～！！（寝ちゃダメ～！！）」

「信君…ごめんね」
「いいよ、気にしないで。　雪姉はいつも頑張ってるの知ってるから、たまには休憩も必要だよ」
「で、でも…信君のお弁当…」
お弁当作れなかっただけでそんなに落ち込まなくて良いのに。
まぁ、結局雪姉起こすのに２０分かかったけど…。
でも、それは裏を返せば普段俺が雪姉に苦労かけてるって事だし。
きっと疲れが溜まってるんだろうなぁ。
どっかで休ませてあげられるといいんだけど…。
「…うん。信君先に学校行ってて。私お弁当作ってから行くから」
「今からって…もう出ないと遅刻しちゃうよ？」

「学校よりも信君の方が大事だもん！」

もん！って…いつも俺を優先してくれるのはすごく嬉しいけど…。
雪姉ってこうって決めたら頑固だからなぁ。
どうにかお弁当を諦めさせられないかな。
いや、諦めさせるのは簡単なんだけど…。
あれやるのってすごく恥ずかしいんだよなぁ～。

「ほら、信君早く行かないと遅刻しちゃうよ？　私は気にしなくて良いから。　ね？」

うぅ～やるしかないか…。
俺のために遅刻させるわけにはいかないし。

「お、お姉ちゃん、僕…雪お姉ちゃんと一緒に学校行きたいな～。だめ？」
え～と、確か下から上目遣いで縋る様に見るといいんだっけな。
って、なんでこんな事知ってんだ？

「し、信君！　うん！　一緒に学校行こうね！　あっ！　で、でもお弁当…」

「だ～め。今日は雪お姉ちゃんと一緒に学食で食べたいなぁ」

自分の猫撫で声って気持ち悪い。
こういうのって女の子がやるべきで男はやっちゃいけないと思う！

「信君♪　ねぇねぇそれってデートのお誘いかな？　かな？」

「デートが学食って言うのもなんだけど、雪姉がデートって言うな

らデートかな」

「しんく～ん♪　えへへ～、信君とデート♪」

「じゃあ、早く学校行こう」

「うん！　早くしないと遅刻しちゃうね？」

すごく綺麗な笑顔で手をだされたら繋ぐしかないじゃないか。

「信君だ～い好き！！」

「ちょ、い、いきなりどうしたの！？」

「信君は優しから大好きだよ！♪　もう絶対に離さないだから♪」

こんな不意打ちはズルイ！

顔が熱い。

きっと真っ赤になってんじゃないか？

なんかズルイ。

俺ばっかり赤面してる気がする。

なんか反撃できないかな？

「……ほら」

自分から腕を組むのって初めてだ。

急にやられたら恥ずかしいだろう。

「信君？」

「行くよ？」

「うん！♪　今日は信君がエスコートしてくれるの？　ありがとう！♪　信君♪　大好きだよ♪」

墓穴掘った！？
くっ！
恥ずかしがるそぶりも無い！？
って言うか大喜びしてる。
これはこれでいいけど…。

「じゃあ行こう？　これ以上は本当に遅刻しちゃうよ」

「そ、そうだね」

うぅ入学2日目にしてバカップル認定されそう…。
今さら？　今さらかもなぁ～。

はぁ～視線が痛い。
嫉妬と妬みと恨みと音叉の視線が痛すぎる。
呪詛でも聞こえてきそうだ。

「おのれ～あいつ～！　危険なのは夜道だけだと思うなよ！」

「俺らの雪さんを～！！　目に物見せてくれる！」

実際聞こえてきたし…。

って言うかお前らの雪姉じゃねぇ！

「信君？　どうしたの？」

「へっ？　あぁ何でもないよ」

って思ってる間に学校に着いたけど…

教室の男子の視線、視線、視線。

結局どこに行っても視線が痛いなぁ～。

まぁ、俺が逆の立場だったら同じ視線を送るけどね。

朝から身内っていうのも抜きにしても可愛い女の子と腕を組んで登校したらねぇ～。

でも、実際に受ける方は結構つらいなぁ。

「おはよう～信」

ん？

「あれ！？　夏樹！？　どうしたの？」

「どうしたって…クラスメイトだろ？　って気がついてなかったのか？」

「ご、ごめん！」

「まぁ相変わらず雪さんに振り回されて周りを見る余裕ないんだろ。しょうがないっちゃしょうがないか」

「あ、あはは…」

「ま、小中とずっと一緒なわけだしこれからもよろしくな」

「うん！　よろしく夏樹」

幼馴染がクラスにいるってだけで結構心強いかも。
しかも、夏樹は結構確りしてるから頼りになるしね。
でも、同じ高校に入学してたんだ…。
周りが見えなさ過ぎてる？

やっと2時間目も終了したか～。
朝からずっと針のむしろだよ。
休み時間のたびに雪姉が来るから一向に視線が緩まない。
むしろ強くなってる？

「どうしたの信君？」

今みたいにぴったり背中に張り付いてる様を見せられれば視線が強くなるか…。

「雪が迷惑なんじゃない？　信？　言うときはちゃんと言わないとダメよ？」

「む～！　迷惑じゃないもん！　ね？　信君」

「どうだか」

「まぁまぁ雪姉も桜さんも落ち着いて」

「信君がいうなら」
「相変わらずですね雪さん」
「あれ～夏樹君？　おはよ～」
「おはようございます」
「信、誰？」
「あ！　そっか、桜さんは初めてだっけ。えっと俺の幼馴染です」
「夏樹です。よろしくお願いします」
「初めまして。桜よ。雪の親友兼ストッパー係よ」
「桜も暴走するくせに」
「何か言った？」
「別に～」
「まあいいわ。それにしても……」
ん？
どうしたんだ夏樹をじっと見詰めて？
「……合格ね。あとは性格かしら」
ん？

小声でよく聞こえなかった。
「？？？　あの～どうかしました？」
夏樹も聞こえなかったみたい。
何を言ったんだろう？
「水臭いぞ～雪。こんな可愛い子隠してるなんて」
「ふぇ？　別に隠してたわけじゃないよ～」
「たまたま会う機会がなかっただけですよ」
「ふ～ん。まぁいいわ。雪、そろそろ教室に戻るわよ」
あっもうそんな時間か。

「頑張ってきてね桜」
「あんたも行くのよ！」
「嫌！　信君と一緒に居る！」
「雪姉、く、苦しい。腕、力緩めて」
「……1時間目の休み時間も同じ事があったような」
「気にしたら負けよ夏樹。ほら！　雪いくよ！」

「いや！　５０分も離れるなんて耐えられないもん！」
「雪…あんたねぇ～。はぁ～信から戻るように言って」
「俺がですか？」
「信からなら雪さんも動くよ」
「そうかな？」
「確実に絶対に１００％いや２００％動くわね」
「すごい自信…え～と雪姉、授業始まるよ？」
「うん。ここで受けるから大丈夫」
「だめだよ。自分のクラスで受けないと」
「だめ？」
「雪姉が怒られるの嫌だな」
「信くん…うん。分かった」
「素であのセリフを言えるのがすごいわ」
「まぁ信ですし」
桜さんも夏樹も俺のことバカにしてる？

「じゃあまた来るね」
「頑張ってね雪姉。あと桜さんも」
「とってつけた感じね。二人とも寝ちゃだめよ」
「あはは。大丈夫です。ばれないように寝ますから」
「あらら。まったく夏樹って以外にお茶目さんみたいね。またね」
ふぅ～次は５０分後か。
これだとどっちが休み時間か分からないな。
「大変みたいだね、信”君”？」
「くっ！　他人事だと思って」
「そんなことないよ？」
夏樹め、絶対に俺で楽しんでやがる！
立場が逆転したとき覚えてろよ。

「信君、信君、信君！　お昼だよ！　学食だよ♪　デートだよ！♪」
「こら！　雪！　まだ授業してるから！」

さりげなく桜さんもついて来てるってことは早めに授業が終わったんだよね？
……気にしてもしょうがないか。
お昼休みのチャイムと同時に来るって…早めに抜け出してないよね？

「あらあら。今日は授業初日だしここまでにしましょうか」

うわ～、先生が楽しい玩具見つけたって目してる。

「起立…礼」

「今日は私も学食の気分だわ♪」

絶対俺たちを観察するつもりだ。
はぁ。
しょうがないか。
約束したし。

「じゃあ、学食行こうか」

「あれ？　雪っていつもお弁当じゃなかった？　それにデートって？」

「今日はお弁当作れなくて…でもでも、そしたら信君が学食でデートしよって♪」

「信？」

「まぁ、多少違うけど大体はあってます」

「ふ～ん。…でもそれじゃあだめね。甘いわよ信。こういったときは確りと罰を受けてもらはないと」

「どうしてよ桜！！　信君とのデートは邪魔させないよ！！」

「雪には罪悪感がないの？　貴方の可愛い可愛い信君にお弁当作ってあげられなかったのよ？」

「そ、それはあるけど…でも、せっかくのデート…」

「デートはしてもいいわよ。ただ少し罰ゲームを受けて貰うだけだから」

「や、やめませんか桜さん？」

「い・や・よ！　今日の雪のお昼はタバスコ入りカレーね！」

「えぇ！？　む、無理だよ！　桜てば私が辛いの苦手なの知ってるでしょ！？」

「だから罰ゲームなんじゃない」

「で、でも～」

「つべこべ言わずさっさと行くわよ！」

「さくら～！　考え直して～！！」

結局押し切られた。
タバスコ入りカレーを目の前にする雪姉。
まだ食べてもいないのにすでに涙目だ。

「うぅ～。本当に食べないとだめ？」

「だめ。ほら、パクっといきなさいよ」

桜さんって結構Sだったんだね…。
すごい楽しそうな笑顔してるし。

「しんく～ん、たすけて～」

…今の雪姉、妙にいじめてオーラが出てるような？
なんとなく桜さんの気持ちが分かったような。
……うん。
ここは傍観に徹しよう。

「ごめん雪姉。俺じゃあ桜さんを止められないよ」

止めるつもりもないけどね。

「ふぇ～ん。孤立無援だよ～」

「ほらほら。さっさと食べなさいよ」

「うぅ～」

「雪姉…ファイト」
顔の前までカレーを持ってきて躊躇う雪姉。
雪姉って相当辛い物が苦手だからなぁ。
「……信君」
「ん？　何？」
「お姉ちゃん頑張ったらご褒美ほしいな？」
「ご褒美？」
「だめ？　ご褒美があったらお姉ちゃん頑張れるんだけど…」
うっ。
涙目でかわいい。
「雪ったら甘いわよ。罰ゲームにご褒美なんてあるわけないでしょ」
「うぅ～おねがいだよ～」
「桜さん、それぐらいは良いよ」
「だ　「本当！？　信君ありがとう！　大好きだよ」　めって…はぁ、しょうがないか～」
「うん！　じゃあ私頑張って食べるよ～！」

今までの葛藤は何だったんだって言いたいほどあっさりとカレーを口にした雪姉だけど…

「ふぇ～！　か、からいよ～！！」

やっぱり…

はぁ～、水でも持ってきてあげるか。

「あれ？　どこ行くの信？」

「水持ってこようかと」

「だめよ。食べ終わるまで水は禁止よ」

「おに～！　さくらのおに～！！」

「じゃあ鬼は鬼らしく徹底的にしないとね」

「あぁぁ～！？」

あっ！

さらにタバスコ投入ですか。

あれは俺でもきついだろ。

「水は最後までお・あ・ず・け・よ」

「お、おに～！　さくらのおに～！　ドSあくま～」

「何とでもどうぞ。それよりまだカレー残ってるよ？」

うわぁ～桜さんめちゃくちゃ楽しそうだよ。
雪姉も雪姉でいじめてオーラが出てるし。
本人は出してるつもりもないと思うけど…。

「信君のご褒美。信君のご褒美。信君の…」

…が、がんばれ雪姉。
ご褒美は景気よくしてあげるから！

「か、からい～」

「雪。はい！　あ～ん」

お、鬼だ！
鬼がいるよ。

「ふぇ～ん。からいよ～」

さ、さすがに可哀想になってきた。

「まだ口がヒリヒリするよ～」

「水飲む？　がんばったね雪姉」

なんとかカレーを食べ終えた瞬間、水道に走っていった雪姉。
戻ってきたと思ったらめちゃくちゃ甘えん坊になってるし。
おまけに5時間目の授業サボる事になっちゃたし…。

まだ2日目なのに。
でも、サボりなのかな？
先生に雪姉が大変なことになっているのでって言ったら出席扱いで見送られた…。
しかも、屋上が良いぞ！…なんてアドバイスまで貰ったし。
いったい雪姉は何をしたんだ？

「ふぇ～ん。しんく～ん」

「あ～、よしよし」

屋上で胡坐かいて座ってる俺の上に雪姉が座って胸に顔を埋めてる。
ここまで甘えるのは珍しいがご褒美だしまぁいいだろう。
俺も役得な気がするし。

「しんくん…ごほうび」

「……」

あれ？
これがご褒美じゃなかったの？
この甘えモードはご褒美とは別なんだ…。
まぁ奮発するって言った…思ったし、別にいいかな？

「やくそくしたよ？」

「何がいいの？」

「何でもいいの？」

「あんまり高くなくて俺にできることなら」
「本当に？」
「？　本当だよ」
雪姉は俺に何をさせるつもりなんだ？
「じゃあ、ぎゅう～ってしてちゅ～ってして」
「牛？　注～？」
「うん！　強くぎゅ～って抱きしめてもらいながらキスして欲しいなぁ」
「…へっ？　だ、だき！？　き、キス！？」
「うん！　信君にキスして欲しいな。そしたら口のヒリヒリも治るんだけどなぁ～」
「む、むむむむ無理無理無理！　絶対無理～！」
「だめなの？　あんなに頑張ったのに？」
「うっ」
「やくそく…したのに…」
そ、そんな泣きそうな声で言われても…
でも、確かにあんなに頑張ったんだし…ってそれでもキスは…。

でもでも雪姉からしてっていってるし俺は別に初めてが雪姉でも…
ってダメダメ！
何考えてんだ俺！　でも…。

「…うぅん。やっぱり違うのでいいよ」

…あぁ！　もう！　くそ！
”ちゅっ”

「！……えっ？　えっ！？　し、しんくん！？」

「じ、自分から言い出したんだから文句いうなよな」
うわ！　うわ！　うわ～！！
やっちゃた！　しちゃったよ！
は、恥ずかしい！　雪姉の顔が見れない！

「…ふぇ…キス…されちゃった…」

「ゆ、雪姉がしてって言った「ファーストキス…」……はっ？　ふぁ、ファーストキス？　は、はじめてのきす？」

「うん…わぁ！　わぁ～！！　し、信君とキスしちゃった！♪　ファーストキス！♪　信君からのファーストキス♪♪　にゃふ～♪♪
信君♪　信君♪♪　しんく～ん♪♪」

ふぁ、ふぁーすときす…雪姉の初めての相手が俺？……～～～やばいやばいやばい！
はははははずかし！　どどどどどうする！　せせせせきにん！？
どどどうやて！？
うわ！　うわ！！　うわ～！！

「信君と初キス！♪　ん～～～～♪　嬉しすぎるよ～♪♪　もう今日は最高の日だよ♪♪　にゃふ～♪♪　私の初めてをあげて～信君の初めて貰っちゃった～♪♪」

「その言い方やめて～違う風に聞こえるから～！　っていうかなんで俺が初めてって知ってるんだよ！？　って、顔！　顔が胸に埋まってるから！！」

「だってお姉ちゃんだもん♪　信君のことは何でも知ってるよ♪
実は信君は～寝てるときに抱き癖があることとか」

「！！！」

「えへへ～♪　毎日信君の温もりを感じながら眠るの気持ち良いんだよ～♪」
ななな！？　そそそそんなこと初めて知ったぞ！？

「えへへ～♪　信君♪　だ～い好き♪♪」

2日目～前編～（後書き）

信が徐々に洗脳されてます。
そして、桜にフラグ？
回収するか分かりませんよ？（えっ！？

2日目～後編～（前書き）

俺ってば課題が忙しいのに何やってんだろう…

2日目〜後編〜

…もう放課後か……5時間目の所為で精神的疲労が……
くぅ〜目を瞑ってもフラッシュバックが！　あの感触が！！

「何身もだえしてるのよ」

「信君どっか痛いの？　お姉ちゃんが付きっきりで看てあげるよ？」

「雪姉！？　と桜さん？　いつからそこに！？」

「なんか私おまけ扱いね」

お、おかしい。
HR終了と同時に屋上に来たのに…どうしてここが…？

「信君だったらどこにいても見つける自信があるよ！」

「確かに一度も迷わずに来たわね…。少し異常かもね」

「そういえば俺、雪姉とかくれんぼとかして1分持ったことないなぁ」

「……ある意味犬以上ね」

「だって私を構成してる成分のほとんどが”信君”だもん！　だから信君がどこにいたって体と本能がわかるよ」

「本能って雪…」

「私の”信君レーダー”は１０ｋｍ以内は有効だよ～」
「雪姉…それって人間やめてるから」
「ん～、そこまで言うなら少し試してみたいわね」
「信君に迷惑かからなければ良いよ～」
「だって。　信、実験してみたくない？」
「…そうだね。　してみようか」
雪姉と離れて少し落ち着きたいしね。
「じゃあ、今から私が信と隠れるから探し出して。範囲は校内限定で制限時間１０分でどう？」
「良いよ～。でも、桜は私とじゃないの？」
「もし信に何かあったら何されるか分からないから一応ね」
「桜と二人きりのほうが危ないよ！」
「どういう意味よ！」
「そのまんまだよ。桜ショタコンだし」
［桜］「ショタコンじゃないわ！　年下が好きなのよ！」
「同じだよ」

「それは違うわ！　ショタは小さい男の子だけど私は年下の男が好きなのよ」

「違いが分からないよ～」

「…もういいわ。さっさと始めるわよ」

「むぅ～。信君と二人きりなんてずるい」

「すぐに見つければいいでしょ？　信君レーダーあるんでしょ？」

「分ったよ。信君すぐに見つけるから心配しないでね？」

「それじゃあ始めるわよ。信、行くわよ」

「5分後に探し始めるから。桜、信君に変なことしたら…」

「はぁ～。しないから。じゃあね」

……

……

…

「この辺でいいかしら？」

「…学長室…ですか？　入っていいんですか？」

「さぁ？　良いんじゃない？」
「さぁって…なんか今わかった気がする」
「何が？」
「あの雪姉と何で親友になれたか」
「良い女だからでしょ」
「自分で言っちゃだめですよ」
「細かいことは気にしない。ほら入るよ」
「あっ！　さ、桜さん」
「失礼しま～す」
ほ、本当に入ってちゃったよ。
学長が居たらどうするつもりだ？
「うん、やっぱりいないわね」
えっ？
居ないって知ってて入ったんですか？
ていうか鍵は？
無用人過ぎるだろ…。
「ん～と、この机の影にでも隠れよっか？」

「はぁ～、もう何も言わないよ…」
「ほら、もうそろそろ5分経つから早く隠れて」
「はいはい」
学長室の机はでかいから2人ぐらいなら隠れられるけど…。
学長が帰ってきたらどうするんだろう？
「なに、信？　学長が帰ってこないか心配？」
なんで考えてることがわかった？
「何でわかったの？　って顔ね。　信はよく顔に出るからね～」
「・・・そんなに顔に出ますか？」
「すっっごく分かりやすいわよ」
「力説されるほどなんだ…」
うぅ～地味にショック…。
「あはは。まぁ良いじゃない。それも信の良い所よ」
「それよりも、信の友達にいた…え～と…名前なんだっけ？」
「夏樹の事ですか？」
「そうそう！　夏樹くん」

「夏樹がどうかしたんですか」

「ん～とね、夏樹くんってどんな子なのかなぁ～て」

「どんな子…ん～…温厚で明るくて、でも少し抜けてる所もあるやつかなぁ」

「へぇ～、私の理想に近いかも」

「えっ？　何か言いました？」

「なんでもないよ。それよりも夏樹くん彼女はいるの？」

「彼女がいるって話は聞いたことないですよ」

そんなに夏樹に興味があるのかな？
もしかして狙ってる？
いやいやまさか。

「よし！」

…まさかね…。
……夏樹なんかごめん。
桜さん悪い人じゃないから怨まないでくれよ。

「なに虚空に祈ってるのよ」

「いや夏樹に怨むなよって」

「どういう意味よ！」
「あははは～。お手柔らかにしてくださいね？」
「無理だよ～」
「その通りよ！　全力で行くわ」
「だよね～。夏樹くんてば桜の好みにクリーンヒットしてるもん」
「あ～やっぱりそうだんだ」
「まあね。顔よし、性格も良いみたいで、年下！　完璧ね！」
「信くんほどじゃないけどね」
「そんな事ないよ雪姉…ん？」
あれ？
「はいはい。まったく信も雪も相変わらずイチャイチャして。やってられないわ全く…ん？」
「ん？　どうしたの？　桜も信君も固まってるよ？」
……おかしいな？
今いるのって俺と桜さんだけのはず…あれ？
「「……」」

「ん？」

二人のはずだったのに…。

「あ～……雪姉いつからそこに？」

「気づかなかったわ…」

「ん～？　最初からいたよ？」

「最初って？」

「夏樹君のことを聞くと事から～」

ほ、本当に最初からいたのか！？

「ず、ずいぶんと早いね？」

「うん！　信君と約束したし桜に何されるか分からないもん！」

「だから何もしないって！」

「うん。そうだね～。桜の今のお熱の相手は夏樹君だもんね」

「うっ！　そ、それよりも早く着きすぎよ。どうやって来たのよ？」

「真っ直ぐ来ただけだよ～」

「真っ直ぐ？」

「うん！　信君がどこにいるのかなんてすぐわかるもん」
「途中で他の教室とか探さなかったの？」
「いないって分かってるのに探す必要ないよ～」
す、すごい自信だな。
「どうして分かるのよ」
「だから本能でわかるんだよ～」
「あ、あはは。すごいね…」
「にゃはー♪　信君に褒められちゃった♪」
褒めてない、褒めてない。
「信、愛されてるわね～」
「愛してるもん！♪」
そんなにはっきり言われると恥ずかしい。
恥ずかしいだけで別に嫌じゃないけどね。
むしろどちらかと言えば…まぁ好きだよね。
家族だし、優しいし、いつも俺のこと考えてくれてるし。
うん嫌いになる要素が無いよね。
でも、一人の女の人としてみたら好きなのか？
うぅ～よく分からない。
まぁ、今は雪姉が好きだってことは分かってるしいいよね？

あ！　もちろん家族としてだから！
うん。それなら雪姉は好きだ。

「信はどうなの？　好き？」

「好き」

「……」

……あれ？
今俺何言った？
好き？…えっ？
口に出した？
え？　えっ？　え！？

「信君！！　うっ嬉しいよ！♪　ねぇねぇ！　桜も聞いたよね！♪
信君が♪　信君が！♪　私のこと好きだって♪♪　好きだって♪
♪♪」

や、やっぱり口に出してた！！
こ、これていわゆる告白！？
告白になるのか！？
なな何してんだ俺！？

「信…あんたも言うわね」

「ささささ、桜さん今、今のはちが」

「今更弁解は無理ね。ほら」

「へ？」

「えへへ～♪　新婚旅行はどこがいいかなぁ♪　海？　温泉？　いっそうのこと海外？　えへへへ～♪　ハネムーンだよ♪♪」

「……」

「ね？」

い、いったいどこからパンフを出した？

というかハネムーンて…。

「ゆ、雪姉……？

「あっ！　信君♪　新婚旅行どこがいい？　ほらほら～いっぱいパンフレット貰ってきちゃった♪」

も、貰ってきたっていつ、どこから！？

って問題はそこじゃねぇ！

「雪姉、少し落ち着いて欲しいなぁ～」

「落ち着いてるよ～♪♪　あ！　そっか～結婚式がまだだよね！

そっか～♪　信君から告白されて舞い上がってるね♪♪　うんうん。

信君の言う通り落ち着いてなかったね♪　でもでも、そこは信君がしっかりフォローしてくれるし私達最高の相性だよね！♪　えへへへ～信君はどこで式挙げたい？」

「まってまって！　雪姉！　俺まだ結婚できる歳じゃないから！」

「信にとっての問題ってそこなんだ…もっと根底に問題があるのに」

「ないよ！　私と信君の間に問題なんてあるわけないよ！」
「あんたたち姉弟じゃないの？」
「そうだよ？」
「血の繋がった姉弟は結婚できないの知らないの？」
「あはは～、日本の法律なんて関係ないよ～♪」
「そこは関係あるでしょ！？」
「ま、まぁまぁ。桜さんも雪姉も少し落ち着いて！　あっ！　そ、そうだ！　雪姉にお願いしたいことがある…ような…」
「なになに？　信君のお願い事なら何でもＯＫだよ！♪　指輪のサイズが知りたいの？　婚姻届ならハンコは押してあるよ？」
なんで押してあるんだよ！？
「用意周到ね」
「準備万全って言ってよ～」
意味変わってないから！
「語感の響きの問題だよ～」
「心を読むの禁止ー！」

「顔に出てるよ～。　それよりお願いってな～に？　またキスしたいの？」

「なに！？　キスしたの！？」

「だー！　何暴露してるんですか！！」

「はぁ～、このバカップルは…」

「えへ～照れるよ～♪♪」

「ゆ、雪姉ぇ！」

「あっごめんね～。お願いってな～に？」

「えっ！？　あ～…その～…」

や、やばい！
話逸らそうと何も考えずに言っちゃた！
うぅ、ここでやっぱり何もないなんて言えばそのまんま暴走してるだろうし…。
何かないのか？

「信君？　婚前交渉はＯＫだよ？」

「雪！　どさくさにまぎれて何言ってんのよ！」

「お、お姉ちゃん！　お姉ちゃんと買い物行きたいなぁ」

「ふぇ？……し、信君」

「あ～ぁ」

え？

な、何この反応？

な、なんかミスったぽいし

どうしよう～

「信君…」

「は、はい」

「そ、それって」

な、なんだ？

何を言われる？

やばいのか？

「それってデートのお誘いだよね！♪　きゃはー♪♪　桜、桜！

聞いた聞いた！？告白の後にデートのお誘い！♪　もうこれって間違いないよね！♪　それに”お姉ちゃん”だって♪♪　もう信君かわいいよ～♪♪　何着て行けばいいかな？　新しい服買いに行ったほうがいいかな？　あっ！　でもでも～信君とのデートで選んで貰うっていうのもいいと思わない？　そうだよね～♪　その方がいいよね♪」

「……」

「……」

「デートはどこに行こうか～♪　繁華街？　港の方？　公園？　教会？…教会？…結婚式場？　結婚？　信君と私が？　…結婚♪　新婚♪　きゃはー♪　信君と教会で結構してあま～い新婚生活だよ～♪♪」

「……」

「……」

「信君は教会で結婚するのもいいよね♪　それとも神社がいいの？　う～ん…信君が両方がいいっていうなら両方やろうか♪♪　そのあとに新婚旅行♪♪　どこに行こっか～♪　温泉がいいかなぁ～♪♪　海外がいいかなぁ～♪」

「…もう止まりそうもないわね」

「ミスった…」

「しばらくすれば元に戻るかしら？」

「たぶん……」

「信君♪　信君♪♪　プロポーズの時は雪お姉ちゃんって言ってね！」

「えっ！？　ぷ、ぷろぽーず？」

「うん！♪　絶対だよ！　お姉ちゃんとの約束だよ？」
「は、はぁ」
「信てば雪にプロポーズするんだ？」
「えっ！？　あ！　ち、ちが！」
「ちがうの…？」
「えっ？」
「ちがうの？」
な、泣く！？
「わ、わかったから！」
「きゃはー♪　信君だいすき～♪♪」
な！？
う、嘘泣き？
さっきまでの涙目はどこにいった！？
「やっぱりするんじゃない」
そんな呆れた顔で見ないで～！
し、しかたないことなんだ！
俺には雪姉を泣かせるなんて選択肢は無いんだから！

そう！
仕方なかったんだ！
「必死に自己弁護してるようだけどつまりはシスコンでしょ？」
「…自覚してるけど他人から言われて傷つく言葉ってあるよね……」
「信君信君♪　私、信君からのプロポーズず～っと待ってるからね？」
「き、期待しないで欲しいな～…」
「信から告白する事は決定なんだ？」
「…桜さんさっきからツッコミしかしてない」
「ツッコミどころ満載なのよ、あんた達」
「羨ましいんでしょ？　桜も早く相手を見つけないとね～♪」
「う、うっさい！」
「えへへ～信君、好き！　好きだよ♪　だ～い好き♪♪」
こんな幸せそうな顔でいられたら俺でなくても拒否しづらいって。
「信君♪　プロポーズ楽しみに待ってるね？」
拒否できないって…
こうやって外堀は埋まってくんだよね。

「信君信君♪　忘れ物な～い？」

「え～と、うん大丈夫」

「プリントとか宿題も？」

「うん。大丈夫だよ」

「じゃあ、帰ろっか～」

「そうだね」

はぁ～、心を落ち着けようと思って屋上に行ったのにかえって落ち着けなかった…。

はぁ～。

しかも、あんな事まであった後に二人きりで下校か…まだ心臓がやばい事になってるし。

「ん～？　どうしたの信君？」

「えっ！？　い、いやなんでもないよ」

「でも顔真っ赤だよ？」

それは雪姉が腕に抱きついてるからです！

いつもなら気にならないのに、流石にあんな事があった後だと目茶

苦茶意識するんですけど！
特に柔らかい感触とか、ふっとした瞬間に香る匂いとか温もりとか！
あ～もう！　一言やばい！

「ねぇ？　本当に大丈夫？　無理してない？　どっか辛いの？」

辛いのはこの状況だから！
さらに強く抱きつかないで！
くっ！
わざわざ少し屈んで上目遣いするのはやめて！
俺がそれに弱いの知っててやってないよね？

「ん～　熱はないよね？　ん～と？」

だいたい雪姉は自分の可愛さが分かってないんだよな～。
仕草の一つをとっても可愛いのにこんな近くでそんなことされたら
…近くで？
ん？
…ん！？
か、顔近くない！？
っていうか今も近づいてる！？
ぇ？
ぇえ？
ななななんでこんなに近づいてくるの！？
ここここんな場所でききききすとかないよね？　ね？

「ゆゆゆゆゆきねえ？　ななななにしてるのかな？」

「ん～と」

”こつ”

「ん～…うん、熱はないみたいだね～。　よかった～。　あれ？
さっきよりも顔赤いよ？」

「ししし心配しなくて大丈夫だから！　うん！　すごく健康だよ！」

な、なんだ。熱測っただけか。…少し残念。
って何考えてんだ。
今日は少しおかしいかもしれない。
うん。
今日が特別おかしいだけだ。

「う～ん、信君がそこまで言うなら…」

「ゆ、雪姉、はやく帰ろう。おなかすいちゃったな～」

「ん？　そう？　じゃあ帰ったらすぐに用意するね♪」

はぁ～。
雪姉に振り回されるのはいつものことだったけど最近は少し違う気がする。
気のせいかな？
新しい環境になったせいで敏感になってるだけかな？

「じゃあ～今日は信君からいっぱい幸せもらったから、いつもの以上に愛情込めてご飯作るね♪」

「いつも入ってるんだね」

「あたりまえだよ～。私の料理の半分以上は愛情で出来てるんだから♪」

「どこの薬品メーカーですか…」

「うん？　惚れ薬とか栄養ドリンクとかなら入れてるよ？」

「入れちゃダメだから！？」

「ただいま～」

「おかえり～信君♪」

隣にいたはずなのになんで毎回俺を出向かいできるのだろう？
こういうのって考えたら負けか？

「ん？　どうしたの信君」

「なんでもないよ。雪姉もお帰り」

「うん♪　ただいま！」

「ゆ、雪姉！　顔埋まってるから！　抱きつかないで！」

「どうしても？」

「だめ」

「信君…だめ？」
うっ…そんな悲しい声で言われても。
「だ、だめ」
な、涙目になってきちゃったよ。
うぅ、俺は悪くないのに罪悪感が。
「本当にダメなの？」
「う、うん」
お、俺悪くないよね？
「しん…くん……」
そ、袖を摘まんでの涙目なんて反則だよ！
「し、信君！？　わっ！　わっ！♪」
…はっ！？
いつの間に雪姉に抱きつかれた！？
「信君あったか～い♪」
あ、あれ？
抱きつかれた？
あれ？　むしろ抱きついたのは俺のほう？

「ご、ごめん！」

は、離れられない！？

「だめ～もうちょっと～」

雪姉の手が巻きつかれてる！？

「ちょ、は、離して」

「何で？　信君から抱きしめてくれたんだよ？　私すごくうれしーな～♪」

「（そ、それは雪姉が可愛いかったから思わず……）」

「私可愛い？」

「うっ。聞こえてた？」

「うん」

く、口に出した覚えはなかったのに。

「私可愛い？」

「あ、当たり前だよ。雪姉は可愛いよ」

「信君♪　私嬉しすぎちゃうよ～♪　信君、信君…大好き！♪」

やっぱり雪姉は可愛いすぎるよ。

「信君、ご飯作っちゃうから少し待っててね」

「うん」

もう長年やっているからスムーズに料理が出来上がっていく。
料理ができない俺から見れば手品や魔法みたいだ。

「信君ちょっと待っててね。今日はハンバーグだよ」

「みたいだね。…ねぇ、その瓶って何が入ってるの？」

「うん？　これ？　栄養ドリンクだよ」

「俺の記憶が正しければハンバーグにそれは必要ないよね？」

「えっ？　隠し味だよ」

「いらないから」

「え～でもでも～信君の体力回復とかに必要でしょ？」

「いらないから」

「…うん。わかった」

よし、今日は安心してご飯が食べられそうだ。

「信君栄養ドリンク嫌いなのかな？」

そういう問題じゃないよ雪姉。

「信君、ご飯できたから食べよ？」

「わかった。じゃあお皿ならべるね」

「ううん。信君は座ってて。私が用意するから」

まぁ雪姉が俺に用意させてくれないのは分かっていたけどね。
下手に手伝うと暴走するし。この前なんて掃除を手伝ったら…
「愛の共同作業…幸せな家庭…」
ってなぐあいに暴走したし。

「信君用意できたよ。早く食べよ？」

「あ、うん」

「それじゃあ」

「「いただきます」」

「はい、あ～ん」

来るのはわかってたよ？
毎日のことだし。

「あ、あ～ん」

でも、この恥ずかしさには慣れない。
「信君、私もして欲しいなぁ？」
これも来るのもわかってたさ。
まぁ、誰も見てないし…
「…しょうがないなぁ～。はい、あ～ん」
「あ～ん♪　うん♪　信君に食べさせてもらうとすごくおいしいよ～♪」
「味は変わらないと思うよ？」
「うん。でも、信君に食べさせてもらうとお腹だけじゃなくて心まで満たされるんだよ♪　全身で幸せを感じられるからすごくおいしいよ♪」
「そ、そうなんだ。ありがとう？」
「うん！　そうだ～！　はい、あ～ん。幸せのお裾分けだよ♪」
恥ずかしいことを躊躇いもなく言うなよ。
家の中で良かった。
「信君あ～ん♪」
「…あ～ん」
「どう？　幸せになった？」

「う、うん。幸せだよ」

こんなことしなくても幸せなんだけどね。

「うん。幸せな家庭にまた一歩近づいたね♪」

「うぇ！？　か、家庭！？」

確かに姉弟だから家庭っていうのも間違いじゃないけど…。

「うん。え～と、あなた～もう一口いかが？…えへへ～このセリフ恥ずかしいね～」

それは俺のセリフです！

ふぅ～。ご飯も食べて、お風呂も入ったし、あとは寝るだけかなぁ～。

「雪姉？」

「……」

あれ？

寝てる…。

雪姉疲れてるのかなぁ？

当然だよな。

学校でも家でも雪姉に面倒掛けてるし…。

ベッドに運んであげないと。

部屋は…どうせ夜中とかに起きてもぐり込むなら最初から俺の部屋でいいか。

間違っても俺が一緒に寝たいわけじゃないぞ。
…誰に言い訳してんだろ。

「バカなこと考えてないで運ぶか。よっと」

結構軽い。

「…うぅ。しんくん……」

「！　な、なんだ寝言か」

起こさないように注意しないと。

「結婚式はお姫様抱っこ〜……」

……本当に寝てるのか？
というかどんな夢みてんだよ。
まぁ、雪姉らしいか。

「おやすみ雪姉」

〜〜雪視点〜〜

……
……
…

あ、れ？
寝ちゃってた？
んっ…信君の部屋？
信君、隣で寝てる。
信君が運んでくれたんだ。
それも、自分の部屋に…。
嬉しいな。
信君も一緒に居たいって想ってくれてるのかな。
そうだといいなぁ。
今日は幸せな一日だったよ～。
朝から信君、積極的だったし。
信君から腕組んできたのって今日が初めてだよね？
びっくりしちゃった。
でも、それ以上に嬉しかった。
桜に邪魔されちゃったけど、
デートもしたし。
…いつかちゃんとデートしたいな。
……今日ってキスしちゃったんだよね。
ずっとずっと、とっておいたファーストキス。
初めてだけは信君からして欲しくて唇だけは避けてたけど、
やっと、やっとしてくれた。
ファーストキスって信君が知ったとき顔真っ赤になってたっけ。
少しは女の子として意識してくれてるって事だよね。
ふふ。
信君気づかなかったかな？
キスされたとき私も顔真っ赤になってたの。
顔赤いの見られたくなくてぎゅーって抱きしめちゃったけど、
そのせいで余計赤くなっちゃた。
見られなかったよね。
きっと、信君は自分のことで手がいっぱいだっただろうし。

それに信君がいけないんだよ。
私が勇気出して言ったのにしてくれなくて、
もう諦めようとしたらするんだもん。
心の準備とか出来なかったよ。
屋上に行くまで何度も何度も心の中で覚悟を決めてたのに…。
勇気出したのに分かってくれないし。
2回も言わせないでよ。
…確かに恥ずかしくて少し遠回りに言ったけど。
でも、ちゃんとしてくれたから許してあげる。
信君だけの特別なんだから。
…信君にしか言うつもりも無いけど。
でも、なんで言うつもりになったんだろう？
本当はもっと断られないような雰囲気のときに言うつもりだったのに。
断られたら気まずいもんね。
ううん。
それだけじゃなくて、信君が私から離れていく可能性だってあった。
嫌っ！
それだけは絶対嫌！！
信君が離れていくなんて耐えられない！
そんな世界いらない！！
怖い。
恐いよ。

「ふぁ！？」

しん…くん？
…ありがとう信君。
信君はいつもそう。
私が不安になってるとぎゅって抱きしめてくれる。

ねぇ？
本当は起きてるんじゃないの？
タイミング良すぎるよ。
寝てるときの抱き癖なんて嘘で本当は起きてて私のこと助けてくれてるんだよね？
しんくん…。
今日はありがとう。
今日は本当に幸せな一日。
明日も今日みたいな日がいいな。
でも、私がもたないかも。
信君が隣にいてくれるだけで幸せで、
抑えが効かなくなってきてる。
もっと信君に近づきたい。
もっと信君見て欲しい。
もっと…もっと……。
ねぇ？
私、がんばるから。
もっと信君に好きになってもらえるように。
だから…
信君も、私を見て。
誰よりも近くで見てて。
ねぇ？
私を好きになってくれるかな？
……
…
今日みたいに寝坊したらダメだよね。
もう、寝ないと。
おやすみ、信君。
今日も信君暖かいなぁ。

2日目～後編～（後書き）

そろそろプロットとか設定をちゃんと決めないといけないかと思う
今日この頃…
キャラブレ、設定の矛盾が出てきそう。
この話しは基本俺の妄想で出来てるからなぁ～……
妄想が続く限り書いて最後に改訂で大丈夫かな？　かな？

3日目～前編～（前書き）

合宿や課題に追われて更新が出来ない（泣

今回は短めな上に空いた時間で書いたから誤字とか多いかも…

3日目〜前編〜

「…し…あさ…よ……おき…」

んっ…なにかきこえる…。

「しん…あさだよ…おきて〜」

ゆきねぇ？

「信君朝だよ。起きて。早く起きないとおはようのキスができないよ〜」

き…す。

「それともお目覚めのキスもする？」

ゆめなら…されても…ん？

「もう〜しょうがないなぁ〜♪　信君甘えん坊なんだから♪♪」

”チュッ”

！！！

この感触に温もりは！？

てか、今の唇じゃなかったか！？

ていうか夢じゃないの！？

「えへへ〜♪　昨日信君がファ〜ストキスくれたし…いいよね♪」

いやいや！ダメでしょ！？
そりゃ、嬉しいけど…って！
ほら！
モラルとかなんとかとかねぇ？

「じゃあ～昨日ベッドまで運んでくれたお礼だよ～♪」

ならしょうが…なくないから！
ってなんで会話できてるの？

「信君のことなら何でも分かるよ～」

そ、そうですか…。

「信君信君♪　今日もいい天気だね」

「そ、そうだね」

「どうしたの？」

「な、なんでもないよ」

「本当に？　お姉ちゃんに隠しごとしてない？」

「なんでもないよ。ちょっと朝から動悸が激しくなっただけだから」

あんな事があればねぇ。

「た、大変！　病院行かなきゃ！」
「だ、大丈夫だから！　うん！　本当に大丈夫！」
「で、でも病気かもしれないよ？」
「大丈夫だって。　理由も分かってるから」
「理由？　何？　どうしたの？」
「え？　あ～そ、それは～」
い、言えない！
雪姉のせいでドキドキしてるなんて言えるはずがない！
「あ～…ゆ、雪姉は今日も可愛いね！」
「ありがとう♪　信君もカッコイイよ！」
一時的に誤魔化せたけどこんなのが毎日続いたら…。
昔はこんなでもなかったのに。
俺雪姉に惚れてる？
いや、まさかねぇ？

「ねぇ夏樹、今日ってこんなに暑かったっけ？」
「それは間違いなく信の後ろにへばりついてる雪さんの所為だよ」

「やっぱり？」

「にゃふ～。信君～」

恍惚として何も聞こえてないよ…。
昼休みに起きたらこんなことになってるなんて。

「ん？　な～に～？」

「何？　じゃなくて、どうして背中にくっついてるの？」

「ん～？　だって寝てる信君の背中が気持ちよさそうだったから。
嫌だった？」

「嫌ではないけど…教室はちょっと」

「じゃあじゃあ、お家だったらいい？」

耳元で甘えた声は反則でしょ！

「ねぇねぇ～？　お家だったら良い？」

だ、抱きしめる力が強くなった！？
しかもさっきから良い匂いがするし！
さらにさらになんとも言えない温もりが主に背中に！

「う～ん。すごく葛藤してるのが良く分かる」

「夏樹！？　れ、冷静に言うな！　ゆ、雪姉、放して。わかったか

ら放して」
じゃないと理性が！
「本当！　じゃあ続きはお家でね！」
「なるほど～。こうして信はいつも雪さんに流されてるわけか」
「こんなときは夏樹の冷静さがムカつくな！　ていうか少しは助けてよ！」
「無理だね。二人の仲には入れそうにないから無理だね」
「二回も無理言うなよ～」
くそ～夏樹のやつ俺を見て楽しんでるよな！
「…信君もしかして嫌だったのかな？」
「へっ？」
「ごめんね？　信君ごめんね」
や、やばい！！
泣きそうになってる！！
「嫌じゃない！　嫌じゃないから！　むしろ嬉しいよ！」
「本当？　お姉ちゃん嫌われてない？」

「嫌うなんて絶対にないから！　いつも感謝してるし好きだよ！」
「どさくさに紛れての告白…信も言うときは言うなぁ」
反論したいが今は雪姉のほうを優先しないと…。
あとで覚えてろよ！
「信君…良かったよ～！　信君に嫌われたらどうしようって思ったよ～」
「俺が雪姉を嫌うはずがないよ。逆ならありえそうだけど」
「それこそないな」
即答で断言された！？
しかも雪姉本人じゃなくて夏樹に！？
「そうだよ！　私が信君を嫌うなんて絶対に絶対にぜ～たいにないんだから！！」
「つまり相思相愛と」
「夏樹うるさい！」
「相思相愛…私と信君が？　私だけじゃなくて信君も？…信君も……」
「な、夏樹！　雪姉のスイッチ入れたな！？」
「うん。悪気はあったんだ」

「あったのかよ！」

「まんざら嘘でもないでしょ？」

うっ！

微妙に痛いところを！

「信君信君！　相思相愛ってお互いがお互いを愛してるってことだよね！？」

あ～目がすっっっごくきらきらしてる。

完璧に暴走モードに入ったなこれは…。

「ということは～私だけじゃくて信君も私を愛してる！？　愛してる！♪　私信君に愛されてる！？　じゃあじゃあさっきの言葉って告白！？　告白！♪　信君は私のことを一生嫌うことはないって…一生愛しますってこと！？　わ！　わ！♪　わ～♪♪　私信君に告白…プロポーズされてる♪♪」

すごい勢いで捏造と改編されてる…。

「うん。いつ見ても暴走した雪さんは面白いね」

「外野はな！」

「信君私はいつでもＯＫです！」

「なんの返事ですか！？」

3日目～前編～（後書き）

感想をいただけると嬉しいです！
誤字脱字は大丈夫ですかねぇ？
あまり出ないようにしてはいるんですが・・・

3日目～中編～（前書き）

今回は少し執筆に取れる時間が少なかったので三回に分けて三日目をお送りしたいと思います。
中篇で学校が終わり、次の後編で放課後と家での様子、雪視点を入れたいと思っています。

それではどうぞお楽しみください。

3日目～中編～

はぁ～。
昼休みの後は体育かぁ。
精神的疲労の後に肉体的疲労はつらい…。

「信だいぶ疲れてるね？」

「誰のせいだよ！？」

「雪さんでしょ？」

「半分は夏樹だろ！」

くそ～からかわれてる。

「あれ～？　そうだっけ？　じゃあそんな信に朗報だよ」

「…何？」

あの笑い…絶対に朗報じゃないな。

「今日の体育は一年の先生が休みだから二年生と合同だってさ」

「ふ～ん。で、何が朗報なの？」

「うん。雪さんのクラスと合同だって」

「……はっ？」

「ふつうは男女で別れるけど…信は無理だろうな～」
「な、なぜ？…い、いや、言わなくていい」
「え～だって…」
「し～んく～ん！」
な、何も聞いてないぞ！
「ほらね？　まぁ、諦めて」
「な、なんのことかな？」
「うん。なんだろうね？」
「信君信君！　今日はお姉ちゃんと体育だよ！」
「や、やだな～。学年違うよ？」
「合同でやるんだって」
「ぼ、僕男なんだけど？」
「知ってるよ？」
「満更でもないくせに～」
「夏樹…少し黙っててくれないか？」

「私信君と一緒がいいなぁ～。だめ？　先生はいいって言ったよ？」

先生！？

何考えてんですか！！

「信君…一緒がいいなぁ～」

「わ、わかったよ」

う、上目づかいされたらねぇ。

「やっぱりね」

うぅ～夏樹の予想どおり…。

「本当！　やったー！　ありがとう信君！　大好き！♪」

ゆ、雪姉てばあたりかまわず大好き言いすぎだよ。

顔が絶対紅くなってるよ…。

「信君行こ！　体育館でバレーボールだよ！」

「うん。わかった」

そういえば、雪姉の体操服姿って初めて見るんじゃないか？

…結構かわいいかも。

「おっ？　やっと来た…って雪？　信まで連れてきたの？」
「うん！　先生がいいって言ったもん」
「本当ですか？」
「…はぁ。本当よ……今日だけ特別」
先生ちょっと疲れてる？
「…職員室でわがままを言うあんたが想像できるわ」
「むぅ！　ひどいよ桜！　確かにしたけど…」
したんだ。
「信、あんたも大変ねぇ～」
「あ、あはは…そうでもないですよ？　それにもうずっと前からだし」
中学も何回かあったし。
「ふ～ん。私、雪とは高校からの付き合いだから話しか聞いてないのよねぇ～」
「今とあまり変わりませんよ」
最近はちょっと激しいけど。

「ねぇねぇ！　その子が噂の信君？」
「へぇ～。思ったより可愛い顔してる」
「線も細いし、へぇ～ふ～ん」
「えっ？　あ、あの？」
雪姉のクラスメイトかな。
すごいじろじろ見られてる…。
動物園のパンダの気分。
「おどおどしてる姿もかわいい！」
「みんなダメ！　信君は私のだよ！」
「あらあら、これ以上は雪ん子が怒り出すわね」
「信君！　大丈夫！？　何かされてない！？」
「もう、雪ん子ったら！　私たちがそんなことするわけないでしょ」
「無駄よ。雪は愛しの信君に関しては暴走一直線だからね」
「信君、信君は私と一緒のチームね！　信君は私が守るもん！」
「もう聞いてないし。桜もよくあの状態の雪に付き合えるね」
「あ、あはは」

「あれ～？　桜も同類じゃなかったっけ？」
「ちょっ！？　ち、違うわよ！　私はあんなに暴走しないわよ！」
「ん～？　まぁそういうことにしましょうか」
「違うってば！」
「そんなことより始めようよ～」
女三人寄れば姦しいって言うけどこの人数だと口をはさむ余地もないね。
はぁ～、今更だけど居心地悪いな～。
「信君？　大丈夫だよ！　お姉ちゃんがついてるもん」
「あ、ありがとう」
みんなこっちを見て笑ってるよ～。
うぅ～恥ずかしい…。

「いくよ～、信君」
「は、はい」
「そ～れ」

なんか雪姉のクラスは俺の名前定着してないか？

「信君、こっち！」

「雪姉！」

「えい！」

ふぅ～。

バレーなんて久しぶりだけど何とかなりそうだな。

「えへへ～♪　信君のお陰で連続勝利だね！」

「俺の活躍じゃないよ。　点取ってたの雪姉だし」

「でもでも～信君が拾ってくれなかったら負けてるもん」

いやそれは皆が俺ばっかり狙って打つからしょうがないんだけど…。

「それにボールあげるのすごく上手かったもん！　私の欲しいところにぴったり来たよ！」

「まぁ何となくだけど欲しいところ分かったし…」

「愛の力ね！」

はっ！？

「さすが雪ん子の愛しの信君！　雪ん子の事ならなんでもわかって

しまうなんて！」

「愛の力恐るべしね！」

ここぞとばかりにからかわれてる！？

「ふふ～ん！　信君と私は相思相愛だもん！　当然だよ！」

雪姉はからかわれてる自覚ないみたいだけど…。

「雪ってば嬉々として肯定してるわね」

反論しても火に油なのはわかるけど…。

肯定するのもどうかと思うぞ雪姉……。

「頼みの綱は桜さんだと思うんですよ」

「何？　私はフォローしないわよ？　信も嫌って訳じゃないんでしょ？」

「まぁ…そうですけど。でも、恥ずかしいですよ…」

「好奇の的だしね～」

他人事みたいに…。

他人事だけど。

「どうにかなりません？」

「無理ね」

「そ、即答…」

「うん。無理。まぁ、頑張って」

うぅ～他人事だからって。
桜さんも楽しんでるみたいだし…。
玩具にされてる……。

「信君、試合始まるよ？」

「あ、うん。今行く

「信君、頑張ろうね！」

「うん」

まぁ、雪姉すごく楽しそうだし、気にしないように頑張るか。
無理だと思うけど。
それにしても雪姉って結構運動神経良いんだな～。
雪姉が運動してるとこなんて運動会ぐらいでしか見てないからなぁ。
真剣な顔して少し凛々しいかも。
元が可愛い系だからかっこいいにはならないけど…。
いつもと少し違う感じがする。
まだ俺の知らない雪姉がいたんだなぁ。

「信君！」

「はいっ…と」

少し右斜めぐらいかな？

「雪姉！」

「うん！　えいっ！」

ナイスサーブ！

「うん！　信君ばっちりの場所だよ！」

「アイコンタクトも無いのに…愛の力は偉大ね～」

「えへへ～。良いでしょ！　私たちの愛は破れないよ！」

そんなに全力で肯定しなくても！？

でも、なまじ本当に分かるだけ否定できない！

「は～い。皆そろそろ終わりにして。雪さんは体育倉庫にちゃんと仕舞ってね」

あっ、もうそんな時間か。

「信君、ちょっと待っててね。今仕舞ってくるから」

「あっ手伝うよ」

「ううん。大丈夫だから休んでて。信君と一緒にやらせてもらう代わりに片付けるって約束だから」

それで片付けが雪姉だったのか。

でも、それなら

「うん。やっぱり手伝うよ。雪姉と体育できて楽しかったし、連れてきてもらったのは俺だし」

「信君…うん、ありがとう！　信君本当に優しいし、可愛いし、抱き心地好いし、もう本当に大好きだよ！♪」

だ、抱き心地って…まぁいいか。

でも、それを言えば抱かれ心地も好いんだけどね。

「信君、倉庫はこっちだよ。案内してあげるね！」

体育の後なのに元気だな～。

元気じゃないほうが珍しいけどね。

「到着～！　ここが倉庫だよ！」

「あっそうだ！　信君気をつけてね。倉庫の扉、建てつけが悪くて閉じ込められやすいから物を仕舞うときは開けっ放しにしないとダメだよ」

「あっそうなんだ。ありがとう、気をつけるよ」

「うん。この倉庫、中からだと特に開けづらくて。外に人がいる時は良いけど、今みたいに二人きりだと……二人きり？」

「ん？　どうしたの？」

「……今閉じ込められたら二人きり？　信君と？　邪魔する人がいない？」

ん？

雪姉何言ってんだ？

小さな声だから聞き取れない。

”バタン”

「え？」

「あ～信君ごめんね～。扉閉まっちゃった♪　どうしよ～出られないよ♪」

「……雪姉、今わざと閉めなかった？　てかすごい嬉しそうなんだけど」

「え～、わざとじゃないよ～」

絶対嘘だ…。

すっごい嬉しそうだし。

「はぁ～。でも、どうしようか。本当に扉開かないし…。汗が引い

て少し寒くもなってきたし」
「信君寒いの？」
「少しね。雪姉は平気？」
「私は…うん！　寒いかな。だから信君、ぎゅーってしよ」
「…えっ？　な、何で？」
「だってお互いの体温で温かいよ？」
「そ、そうだけどって！　俺まだするって言ってないのに抱きつかないの！」
「私じゃ…いや？」
「うっ」
「それにこれ以上冷えたら風引いちゃうよ」
「で、でも恥ずかしいよ」
「誰も見てないから大丈夫！　ほら、信君もぎゅーってして？」
うぅ。
恥ずかしいけど雪姉の言うとおりこれ以上冷えたら風邪引いちゃうし…。
緊急事態だからしょうがないよね。

「はぁ～♪　信君温かい♪　それに私今、信君に抱きしめられてる♪　信君…信君♪　しんく～ん♪♪」

うぅ～雪姉の声がどんどん甘くなってく…。
それに体育のあとだから汗で雪姉の匂いが強いし。
俺の理性が秒読みな気がするのは気のせいか？

「しんく～ん♪♪　しあわせ～♪♪」

雪姉あったかいし、柔らかいし、気持ちい……はっ！
が、頑張れ俺の理性！

「はぅ～♪　信君の匂い♪　信君が近いよ～♪　キスしちゃおうかな～♪」

「……きききキス！？」

「しんく～ん♪　しよ～♪」

雪姉とキス！？　雪姉とキス！？　雪姉とキス！？
誰が！？　誰と！？　いつ！？

「しんく～ん♪」

「だだだだめだよ！」

「何で？　誰も見てないよ？　ねぇ？　しよ？」

だ、誰も見てない？

「ねぇ？　誰も見てないよ？」

だ、誰も見てないなら…だめだ！
流されてるぞ、俺！

「昨日もしたし、ねぇ？　いいでしょ？」

そ、そうだ。
昨日もしたし。
い、いいかな……？

「しんくん♪　私はいつでも良いよ？」

うぅ、も、もうダメだ。
俺には耐えたれない！
雪姉が言ってきたのが悪いんだ！

「ゆ、雪姉…」

「信君♪」

”バンッ”

「何やってんのよ！　雪！」

！！！

「って！　信までいるし！　ていうか何で抱き合ってるのよ！　まったく、授業サボって何してるかと思えば！」

「そんなことはどうでもいいの！　それより桜！！　せっかくいい所だったのに邪魔しないでよ！！」

あ、あぶなかった。
俺、完璧に流されてた。
あと少しでも桜さんが遅かったら…。
いや、遅くても。
ってまだ思考がおかしいし。

「雪！　あんたは羽交い絞めにしてでも連れて行くわ！　えぇ！
これ以上羨ましい事させないんだから！」

「桜なんかもう絶好だよ！　離して～！　信君と一緒に居るの～！
いや～！」

…俺も早く教室戻らないと。

3日目～中編～（後書き）

後編は合宿後に書くので、1～2週間ほど更新がないかもしれません。
帰ってきたら頑張って早めに更新できるようにするので少しの間お待ちください。

3日目～後編～（前書き）

気づけば1万PVを達成してた…感謝感激です。
この話しを読んでくださった皆様、本当に心から感謝です。
ありがとうございます。
これからも頑張っていきたいと思いますので応援よろしくお願いします。

3日目～後編～

「信君信君信君！　帰ろう！　デートしよ～♪」

放課後入って1番最初に声をかけてくるのがクラスメートじゃなく雪姉ってどうなんだろう？

なんかこれだと俺学校に友達いないみたいじゃないか？

まぁ、まだ夏樹しかいないけどね。

「信君？　だめ？」

「えっ？　あぁ、いいよ」

「信もとうとうデートって言葉には反応しなくなったね」

「公認デートだね♪」

「うっ…は、早く行こう雪姉」

「デートが待ちきれないなんて可愛い♪」

デートって言っても商店街で夕飯の材料を買うだけなのに……。

「今日の夕飯はどうするの？」

「お魚にしようかな？　信君は食べたいのある？」

「雪姉のだったら何でも美味しいからなぁ～」
「えへへ～♪　嬉しいなぁ♪　キスしてあげる♪♪」
「えっ！？　えぇ！？」
キスってここ商店街のど真ん中なんですけど！？
魚屋のおじさんとかおばさんがメッチャ興味津々ですよ！？
「仲良いわね～雪ちゃんに信ちゃんわ」
「坊主、結婚秒読みなんじゃねえか？」
「えへへ～♪　信君と私は相思相愛だもんね～」
ちょっ！　ここぞとばかりに肯定しないで！
噂が回るの早いんだから！
「まぁ仲良いのわ分かってたけどな、坊主！　確り幸せにしてやれよ！」
「雪ちゃん、あなたなら良いお嫁さんになれるわ」
「ありがとう～！　おじさん、おばさん、私幸せになるね！」
待って！　待って！！　待てえ～い！！
もう結婚前提に話されてるの！？
確かに今までにも色々やってきたけどさ！
商店街のど真ん中で雪姉に告白されたり、

肉屋のおじさんの前でほっぺにキスされたり、
考えれば考えるほど出てくるけど！
急すぎるでしょ！？
……自信ないけど。
と、とにかく結婚前提に話すのは早い！
まだ付き合ってもいないんだから！

「確かに雪姉は可愛いし理想のお嫁さんだけど、まだ、告白もしてないし……ん？」

あれ？　なんか雪姉もおじさんもおばさんも固まってる？
どうしたんだ？

「し、信君？　それ本当？」

「えっと？　何が？」

「おいおい坊主、そこでしらばっくれるのはねぇよ」

「そうよ。信ちゃん、女の子はねはっきり言ってくれるほうが嬉しいのよ」

あれ？　話しが見えない……

「信君、さっき理想のお嫁さんって言ってくれたのって本当？」

ふぇ！？　何で！？
口に出してた！？

「ねぇ？　信…君、本当かな？」

う、潤んだ目でこっちを見ないで！
ほんのり紅くなってる顔と潤んだ目がメッチャ可愛いよ！
そんな期待する顔されたら誤魔化せないじゃないか！！

「ほ、本当だよ…雪姉は俺の理想だよ」

「し、しんくん――う、うれしいよ～♪」

わ！？　わぁ！？　な、泣いてる！！
ど、どうして！？
俺何かしたか！？

「えへへ、嬉しすぎて涙出てきちゃった♪」

「くぅ～～！　坊主も青春してんじゃねか！！　ここは一発ぶちゅってやっちまえ！」

「もう、あんた！　口悪いわよ！　でも、キスしてあげると良いんじゃないかしら」

「ちょっと！？　何言ってるの！？　おじさんもおばさんもおかしくない！？」

「しんくん……いつでもいいよ」

「雪姉も目を瞑っちゃダメ～～！！」

はぁ～。
何も体育倉庫で出来なかったからって街中でキスしようとするなんて…。
まぁ、少しは俺の所為でもあるけど。
お陰で精神的疲労が…。
ってこれはいつもか。
べったりくっついてくるのは嫌じゃないけど。
人の目のあるところは勘弁して欲しいな。
これからは商店街公認かなぁ～。
前々からだった気もするけど今日で決定打が打たれた気がする。
気のせいだといいなぁ。
いや、もう家に着いたんだし忘れよう。
はぁ、今日はもう寝よう。

「しんく～ん♪　一緒に寝よ～」

「いいよ」

「うん。今日商店街のおじさんにお似合いの夫婦だねって言われちゃったね」

下校の時の事は忘れようと思ったのに……。

「これで明日からもイチャイチャできるね！」

「な、なんで？」

「だって～商店街公認だよ？」

「やっぱりそうなの！？」

「信君？　いつプロポーズしてくれるの？」
「する事確定なの？」
「うん！　私はいつまでも待ってるよ！」
「うっ期待しないでよ」
「えへへ～♪　花嫁修業はばっちりだよ♪」
それは確かに…。
「信君。待ってるから…」
言うだけ言って寝ちゃったよ。
はぁ、俺も寝よ。

～～雪視点～～
今日も一日幸せの日だったな。
朝は信君とキスできたし…本当は信君からして欲しかったけど。
そ、それに今日は告白してもらっちゃたし。
嫌うなんて絶対にない…かぁ～。
どうしよ、嬉しすぎて泣いちゃいそうだよ。
今日は信君に泣かされてばかりだよ。
商店街でも不意打ちしてくるし。
ずっとずっと信君のお嫁さん目指して頑張ってきて、やっと言ってくれた。

俺の理想のお嫁さん……。
良かった…。今日で全部報われた気がする。
でも、気を抜いちゃダメ。
これからも信君の理想でい続けるんだから。
私頑張るから。だから、信君、これからも私を見て。
もっと私を好きになって。
お願い。私頑張るから。
私は信君のためにならなんだって頑張れるんだから。
……そういえば、体育のときの信君少し変だったかも。
いつも以上に見てくれてた気がする。
何でだろう？
倉庫でもいつもならもっと戸惑うのに。
なのにぎゅってしてもらっちゃった。
温かかったな～。
どうしよ。最近信君のことになると抑えられないよ。
すぐに抱きしめて欲しくなっちゃう。
キスもして欲しくなっちゃうし。
あまり信君を困らせたくないのに。
好きが止まらない。
信君…好き。
好き、大好きだよ。
だから少しずつでもいいから私を好きになって。
待ってるから。私の好きを受け止めてくれるまで。
そしたら、プロポーズして欲しいなぁ。
信君…大好きだよ。

3日目～後編～（後書き）

最近この話の長さが気になる…
この小説は2日目とかは4，000～5，000字で書いていたのですが
3日目は2，000～3，000字で書いています。

2日目みたいに前編後編でわけるか3日目みたいに前中後編に分けたほうが読みやすいのか意見があれば感想にお願いします。
なければ2日目みたいな形に直そうと思います。

その他にも誤字脱字や日本語のおかしい所などを教えていただければ幸いです。
些細な感想とかでも良いので感想をお待ちしております。
長々とすいませんでした。

4日目～前編～（前書き）

今回は糖分少な目…

4日目～前編～

んっ。
……。
あ、さ…？
おきなきゃ。
「よっと…と」
あれ？
地面が揺れてるような？
「信君おはよう！…ん？」
「おはよう、雪姉」
雪姉の声が妙に頭に響く気がする。
「ん～？　えいっ！」
「うぁわっ！」
な、なんだ！？
か、かおがちかい！？
だき、抱きしめられてる！
「…信君」
お、おでこがくっついてる！

おでこが冷たくて気持ちいい…じゃなくて！
す、数センチ先に雪姉の唇が！

「信君」

「なななななに！？」

「信君！　今すぐベッドに寝て！　あとは全部お姉ちゃんがやるから！」

「や、やるって何を！？」

少し目が潤んでるってことはそういうことか！？

「信君、無理しちゃだめ！」

「全部わかってるから。あとはお姉ちゃんがやるから、信君はベッドに寝てて」

「ゆ、雪姉！　まって！　まって！！　今は朝だよ！？　が、学校あるから！」

「朝も昼も夜も関係ないよ！　学校も今日はお休み！」

や、やばい！
完全に目が据わってる！

「ほら、早くベッドに寝て。心配いらないから」

「い、いや、でも…」

「信君がそんなに学校が好きになってくれてお姉ちゃんも嬉しいけど、今日はお姉ちゃんの言うこと聞いて、ねっ？」

「ねっ？　って言われても…こ、心の準備とか……」

「でもでも、無理すると熱出ちゃうよ～」

「いやでもほら、せ、世間体とか…」

「……ねつ？」

「そうだよ～。信君、今日はお休みしよ？　熱あるよ」

「無理すると倒れちゃうからベッドに寝てよ？」

「後は全部お姉ちゃんがやるから」

「……」

「そういうことかぁ～」

”どさ”

「し、信君！？　大丈夫！？　きゅ、救急車！！」

「だ、大丈夫だから。安心したというか残念というか…ち、力が抜けただけだから」

「ほ、本当？　無理してない？　あ！　今お薬もってくるね」

”がちゃっ”
”ぱたぱたぱた…”
はぁ～焦った～。
もう頭がボーっとする。
これって熱のせい？
それとも血が上りすぎた？
…はぁ。
あんな勘違いするなんて、欲求不満か？
”がちゃっ”
「信君お薬とご飯もってきたよ」
「ありがとう」
「少しでもご飯たべられる？」
「うん、食べる。それより、雪姉は学校に行かないと」
「ううん。今日は行かない」
「で、でも。俺は一人でも平気だから」
「いや。今日は信君と一緒に居る」
「いやって…。熱もそんなにないし俺は平気だよ？」
「やっ！　信君を朝からず～っと独り占めできるんだよ！」

「信君のお世話がず～～～とできるんだよ！」

「私の幸せなんだよ！！」

「し、幸せって…」

「毎回、風邪引くたびに言われるけど…俺の世話して何が幸せなの？」

「全部だよ！　信君のそばで、信君のために何かできるのが幸せなんだよ♪」

「そ、そうなんだ」

ここまで言い切られると照れる。
しかも本当に幸せそうに言うし。
面倒見られる俺が言うのもなんだが、損な性格だよな～。

「ねぇ、だめ？　一人がいい？　お姉ちゃんじゃダメ？」

「それは居てくれた方が嬉しいけど、あんまり一緒に居るとうつっちゃうよ？」

「信君が治るならうつしていいよ」

「それはダメ。雪姉だって知ってるだろ。雪姉が倒れたら俺は何もできないんだから」

昔から雪姉が世話してくれたから、家事なんて全くできない。

そう考えると俺って雪姉がいないとダメだな…。

「それって信君は私がいなくちゃダメってこと？」

「そうだよ？」

「…えへへ～♪　信君は私がいないとダメなんだ～♪」

そういえば、この会話も何回目だっけ？
俺が風邪引くたびにこんな会話してる気がする。

「信君♪　はい。あ～ん♪」

「…自分で食べられるよ？」

「だ～め。あ～ん♪」

「…あ～ん」

……

……

…

「雪ちゃん雪ちゃん、けっこんってな～に？」

あぁ、今俺は夢を見てる。

これって小学1年のときだったかな？
昔は雪姉のこと雪ちゃんって呼んでたんだよな～、懐かしいや。
それにしても、夢の中で夢だった自覚するのって珍しいよな？
確か明晰夢ってやつだっけ？　あんま詳しくないけど……。

「結婚はね好きな人とずっと一緒にいるって神様にお願いするんだよ」

「へぇ～じゃあ僕は雪ちゃんと結婚する！」

「ふぇ？　信君結婚してくれるの？」

「うん！　僕雪ちゃん大好きだもん！」

「本当！　じゃあ、お父さんとお母さんに言わないと」

「うん！」

あの頃は無邪気だったな～。
この後結婚は大きくならないと出来ないって言われて二人して落ち込んだっけ。
この頃からすでに俺は雪姉のこと好きだったのか。
……いや、好きだって事を否定するわけじゃないが、わけではないのだけど。
自然と好きだって言葉が出たな。
うん、夢だし多少は本音をだしてもいいよね？
誰も聞いてないしね。
それより、俺は何時から雪姉って呼ぶようになったんだっけ？
なんか事件があったような無かったような？
まぁ、覚えてないってことはそれほど重要じゃないよね？

って、場面が変わった？

「信君信君！　私１６歳になったよ！」

「うん、誕生日おめでとう雪姉！」

これは結構新しい記憶だな。
ちょうど1年前だな。
あと１０日後が雪姉の誕生日だし。
……やべ！　忘れてた！　起きたら覚えてますように！！

「信君！　私１６歳になったから結婚できるよ！」

「そうだね？」

「むぅ～。信君私と結婚できるのにどうして喜んでくれないの？
私のこと嫌いになっちゃった？」

「って！　結婚相手って俺のことだったの！？」

「当たり前だよ！　信君以外と結婚なんてするはず無いもん！」

「あ、あ～……でも、俺は男だから１８歳まで無理だよ？」

「あれ？　そっか～…残念」

「ていうかそれ以前に俺弟だし」

「関係ないよ？」

「あるでしょ！？」

俺ってば何回雪姉に告白されてるんだろうね？
多分３６５×年齢分は告白されてる気がする……。
最近はさらに積極的になってるし。
なんか焦ってるよね？
誰かに取られるって思ってんのかな？
告白されたことも無いのに。
というより焦らなくちゃいけないのって俺のほうだよね？
雪姉ってば何回も告白されてるし可愛いし綺麗だし理想だし。
だいたい、すぐに涙目で縋る様な表情でお願いしてきたり、甘えた顔と声で誘惑したり卑怯だ！
あれじゃ俺の理性はすぐになくなるに決まってるじゃないか！
うん、全ては雪姉が可愛すぎるのがいけないと決まったな。

「……君…し…ん」

あれ？
周りがぼやけてきた？
なんか声も聞こえるし…起きるみたいだな。

「信君？　大丈夫？」

「んっ？　あ、本当に起きた」

「ふぇ？　ど、どうしたの？　何かあったの？」

「あ、あ～何でもないよ」

「でもでも、なんか喜んだり唸ってたりしてたよ？」

「あ、あはは。少し夢を見てただけだよ」
は、恥ずかしい～。
「そっか～どんな夢だったの？」
「昔の夢だよ。雪姉に告白される夢」
「ん～？　毎日してるからいつのかな？」
毎日してる自覚あったんだ……。
「1年生のときのと去年の」
「1年生のって信君から告白してくれたやつだよね！　嬉しいな～♪　覚えてくれてたんだ～♪♪」
「雪姉こそ覚えてたんだね」
「当たり前だよ！　信君とのことは全部覚えてるもん！　初めてしゃべった言葉から昨日の寝言まで！」
「……何も言えないってこういう事なんだね」
「何でもじゃないよ～知ってることだけだよ？」
「何もきいてないなからね！？」
何時の間にそんな言葉を覚えたのだろうか？

というか初めての言葉って雪姉も1歳か2歳だよな。
……本当に覚えてたら天才だよね？
でも、雪姉のことだからあながち否定できない！

「信君。体調はどうかな？　私の見る限り大分良くなってるかなって思うんだけど」

「うん。そうだね。体のだるさもほとんど無いかな」

「少し頭痛はあるけど食欲はありそうだね？　熱は…6度8分ってとこかな？」

「……なぜわかる？」

「お姉ちゃんだもん♪　まってて今お昼持ってくるから」

さすが雪姉。俺より俺の事を知ってるだけのことはあるかも。
でも、本当に6度8分なんだろうか？
あとで測ってみるか。

「はい信君。またお粥だけどいいかな？」

「良いよ。雪姉の美味しいから」

「えへへ～♪　ありがとう♪　じゃあ、あ～んして」

「あ～ん」

朝もやられたし抵抗感がなくなってるなぁ～。

美味しく頂ました。
あのあと熱測ったら６度８分…雪姉本当にすごいね……。

4日目～前編～（後書き）

お知らせとアンケートがありますのでよろしかったらご協力ください。
お願いします。

４日目～中編～（前書き）

だいぶお待たせしてしまい申し訳ないです。
後編は再来週までには完成させたいと思います。
５日目からはまた前後編で掲載したいと思います。

4日目〜中編〜

”ピーンポーン”

チャイムの音で目を覚ました。
どうやらお粥を食べた後また寝てたようだ。
今は夕方か。ずいぶんと寝てたみたいだ。
体調も良くなってこの分なら明日には学校に行けそうだな。

「信君。桜と夏樹君がお見舞いに来てくれたよ。大丈夫？　起きられるかな？」

「うん。大丈夫だよ。大分良くなったみたい」

「本当！　良かった〜。じゃあ、桜達呼んでくるね」

たかだか1日休んだだけでお見舞いに来てくれるとは思わなかった。
少し嬉しく感じる。

「信、体調はどう？」

「信、先生から今日の分の手紙と宿題貰ってきたよ」

「桜さんに夏樹ありがとう。でも、宿題はいらないかな」

「信君、だめだよ。ちゃんと勉強しないと私と同じ大学いけないよ？」

「雪……あんたの中では同じ大学に行くことは決定なのね」

「桜さん、当たり前じゃないですか。あの雪さんが信と違う大学にいくとはとても思えないですよ」

確かに違うとこ行っても追いかけてきそうだな。
まぁ、そもそも同じ大学に行く予定だけど。
近くに経営と調理の両方が学べる大学があってよかった。

「その顔を見ると信も雪さんと同じ大学に行くみたいだね」

「信も雪も大学で何すんの？」

「私が料理を勉強して、信君が経営を勉強して一緒に喫茶店開くの。
それで、それで～私と信君がお客さんからおしどり夫婦ねって言われるんだよ！
それでそれで自分達で作ったウエディングケーキで結婚式をするんだよね♪」

「確かに喫茶店やろうって言ったけど、そこまでは言ってなかったよね！？」

「それいいわね！　信！　雪の代わりに私としない？」

「桜さんも何言ってるの！？　ゴホゴホッ」

「2人とも信はまだ治ってないからその辺で抑えて」

「夏樹……」

やっぱり夏樹はいい奴だ！

普段からかってくるけどこういう時は頼りになる！
「治ったら一日中甘えていいですから」
「ちょっ！？　夏樹！？」
「本当！？　信君！　お風呂も一緒でいい！？」
「もちろんです！」
「やた～♪」
「なつきぃー！」
「なら私はデートね！　信にたっぷりお姉さんの魅力を教えてあげるわ！」
「なら桜さんのデートの日程は僕がやっておきますよ」
「まて！？　本当にまて！」
「ありがとう！　信の次は夏樹ともね？」
「あはは。　いいですよ」
「少し前の気持ちを返せー！」
「信君…まだ休んでないと体に響くよ？」
「3人の所為だよね！？」

うぅ～理不尽だ！
雪姉とお風呂なんて……なんて……か、確実に理性が飛ぶ。
断言できる。理性なんて1秒も持たない！

「うふふ、信てばかわいいわぁ。私の弟もこれだけ可愛いければよかったのに」

「そういえば～桜の弟君、元気なの？」

「元気も元気で最悪よ。反抗期になってから可愛げなんてあったもんじゃないわ」

「桜さんって弟いたんですね」

「信も初耳なのか。なら僕が知らないのも無理はないですね」

「あれ？　言ってなかったっけ？」

「信はともかく僕は知らなかったですね」

「俺はともかくってどういう意味だよ」

「信は雪さんの事で頭いっぱいで忘れてるだけかもしれないし」

「そうなの信君？」

「それはもう当然ですよ。信は1年365日いつでも雪さんの事で頭がいっぱいで授業中も雪姉～雪姉～って言ってるんですよ」

「信君！♪」

「ちょっと待て！？　何その捏造！？」

「本当の事だろ？　入学式の後、信ってば寝言で雪姉～って言ってたし」

「なっ！？」

き、記憶にねぇ！？　ほ、本当に言ってたのか！？
夏樹ってばこの手の嘘はつかないから本当の可能性が高いけど！
何もこのとき言わなくても！？
って、雪姉が静か……？

「ゆ、雪姉？　あ、あのだな」

「……信君」

め、目が潤んでる！？　声かすれてる！？
な、何が起きた！？　泣くような台詞が今の会話の中にあったのか！？
夏樹か！？　夏樹かー！？　夏樹の所為なのか！？

「な、なつきー！　ど、どうすんだ！？　雪姉泣かしたらお前だってただじゃ置かないぞ！！」

「直接な原因は信だよ」

「俺が何をした！？」

「信君」

「な、何！？　どうしたの？　どうすればいいの？」

「私と結婚してください」

どういう流れだ！？

どうしてプロポーズされた！？　俺からするまで待ってるんじゃなかったの！？

何か！？　夢を見るまで私を必要としてる！　私感激！　もうこれは結婚するしかない！！　ってことか！？

「なるほど。分かったわ」

「桜さん？　何が分かったんですか」

「今の雪の思考の流れよ」

「教えて貰えますか？」

「要するに、夏樹の言葉で妄想スイッチが入ってた雪は、信君が夢にまで私を必要としてる！　嬉しさでもうどうにかなっちゃう！　こんな嬉しさをくれた信君には結婚して恩返しするしかない！　私は信君と結婚したい！！…って感じね」

「なるほど～流石は雪さん。そしてそこまで理解できる桜さんも流石ですね」

「ま、もっとも信も分かってたみたいだけど」

「あぁ、信は雪さん検定1級を持ってますから」
何その検定！？
「ねぇ？　信君……大好き」
……はっ！？
意識が一瞬飛んだ。
なんていう精神攻撃。今の俺なら紙に判子を押してしまいそうだ。
「何の紙に？」
もちろん婚姻届だ。
「信、今自分が何しゃべってるか自覚あるか？」
ん？　おかしいぞ。
心の声と会話してる？
「全部しゃべってるけど？」
「……夏樹、どこから？」
「意識が一瞬飛んだからかな」
「最初から！？」
「ちなみに雪が幸せで死にそうよ？　信、うらやましいから次私ね？」

「雪姉が死にそうって……」

どうして雪姉が俺の腕の中に居るんだろう？
さっきまでベッドの上で上半身だけ起こしてる状態だったよな？
んで、今は俺の脚の上に雪姉を横座りで抱っこして、顔を胸に抱き込んでる状態。
……あれ？　おかしくない？　いつの間に雪姉を抱きしめたんだ？

「信、混乱するのも良いけど、そろそろ雪さんがとろけるよ？」

「あわわわ！？　ご、ごめん！」

「やぁ～、もうちょっと～しんくん～ぎゅ～うってして～」

「とろけたわね」

「とろけましたね」

「ゆ、ゆきねぇ！？」

「えへへ～しんく～ん。だ～いすき～」

4日目～中編～（後書き）

感想を心の底からお待ちしております。

4日目～後編～（前書き）

楽しみにしていただいた方、長々とお待たせしてしまい申し訳ないです。

4日目～後編～

「今日は私お泊りしたいと思うのよ」

「桜さん？　いったいどうしたんですか？」

あまりにも突然で一瞬何を言われたか分からなかった。

「そうだよ。信君と私の愛の巣にお邪魔虫はいらないんだよ！」

愛の巣ってどういうことですか！？

一緒の布団で寝てたりするけど俺はまだ清い体のはずだ。

「いいじゃない。お泊りセットは持ってきてるわよ」

「そういう問題じゃないもん！　私と信君の2人きりの時間を邪魔しないでよ！」

「はいはい。あっ！　私の部屋は雪と一緒でいいからね？」

「……僕はそろそろ帰りますね」

「夏樹、ここで逃げるのは卑怯じゃないか？」

「背に腹は変えられないからね」

「……病人を残していくのか？」

「ここで残って観察するのも良いけど、巻き込まれて大変な目にあ

いそうだからね」

夏樹の奴2人が暴走することを予見してやがる！
ここで帰すとストッパー（生贄）がいなくなる！
なんとしても泊まらせないと！！

「なつ……き？」

いない？

「おじゃましました～」

「な、なつき～～！？」

何時の間に帰ったの？
本当に帰ったの？
二階の俺の部屋からどうやって玄関まで？

「むぅ～……今日だけなんだからね」

「ありがとね、雪」

「あれ～？　信君、夏樹君は帰ったの？」

「あれ？　本当だ。いつのまに帰ったのね」

「…ぇぇ、あっというまに帰っていきましたよ」

こういう時だけ行動が速いとか卑怯だ。
熱が下がったとはいえ病み上がりの体力でこの2人の暴走を止める

のか。
無理だろ。
「大丈夫だよ信君。お姉ちゃんがついてるから！」
「ゆきねぇ～」
「ほら、横になってて。お夕飯は食べられる？」
「うん。食べられるよ」
「待っててね♪　すぐに作ってくるからね♪　桜も行くよ」
「そうね。信、雪と私の料理で元気いっぱいにしてあげるからね」
これはもしかして杞憂だった？
そ、そうだよね。
いくらなんでも病人の俺を相手に暴走なんてするわけないか。
さすが雪姉！
惚れ直し…たんじゃなくて見直した！

なんて思ってた俺が間違いだったよ。
「信君あ～ん♪」
「信あ～ん」

2人から同時にご飯を出されても困る。
いや、雪姉…ご飯を置いて鯖の味噌煮にしても変わりません。
両方ご飯なのが問題だったんじゃないから。

「お味噌汁だった？」

「種類の問題じゃないって……口に出してた？」

「表情で分かるよ～」

それなら”あ～ん”を渋ってるのも分かって欲しいのだけど？

「あ！　そっか～。お味噌汁はあ～んってできないもんね」

「そこなの！？」

「でも、口移しは恥ずかしいよ～」

「人の話を聞いて！？」

雪姉ってば俺が病み上がりなの忘れてないか？
桜さんがいるせいで余計に対抗意識燃やしてるし。

「雪。さっきはあんたが食べさせたんだから次は私の番でしょ！」

「違うもん！　信君のお世話をして良いのは私だけだもん！」

「俺は自分で食べられんだけどなぁ……」

「うん！　信君はしっかりしてるもんね♪　でもでも～まだ無理す

ると熱がぶり返しちゃうかもしれないから今日はお姉ちゃんに全部任せてね♪　ご飯もお風呂も添い寝も結婚も全部してあげるからね♪」

「最後の３つはダメだよ！？」

「そうよ！　私にやらせなさい！」

「桜さんでもだめだからね！？」

食事ってこんなに疲れるものだったけ？
おかしいな箸さえ持たせてもらってないはずなのに……。

「はい。信君あ～ん」

「あ～ん」

精神疲労って肉体にもくるんだよな～。
今日は休めそうにないかも。

「くっ。雪ってばあんな自然に餌付けしてるなんて！」

あ～なんか桜さんが言ってるが大した事じゃないだろう。

「ふっふ～ん。見た桜？　これが私と桜の差よ！」

「ま、まだよ！　信！　野菜も食べないとダメよ。はい。あ～ん」

雪姉も桜さんを焚き付けないで欲しいなぁ～。

「え、えっと……あ、あ～ん」
「なんで私のときは躊躇うのよ！」
「それが私と桜の差なんだよ～」
「私より雪の方がいいって言うのね！」
「私と信君は相思相愛を超えて一心同体なんだよ♪」
「運命共同体って意味でならあってるかも……。なにせ雪姉が居ないと俺は生きていける自信がないし」
家事とかの意味で。
「し、信君♪♪」
「ちょ、ここでそれを言う！？　私も居るのに2人の世界とか最悪よ！」
「信君、信君信君。信く～ん♪」
「わっわ！　ちょ、雪姉抱きつかないで！　味噌汁こぼすから！」
「私スルーされた！？　しかも抱きつくの拒否する理由って味噌汁だけなの！？」
「えへへ～信君好き～。大好き～。結婚しよ～」
「ちょ、雪姉！　桜さん居る！　桜さん居るから落ち着いて！」

「こんなときに思い出されて嬉しくないわよ！！　うぅ～私も2人の世界が作ってみたいぃ～」

ふぅ～やっと食事が終わった。
いつもの2倍の時間がかかるってどういうことだよ。
はぁ～疲れた…。

「信く～ん、お風呂沸けたけど入る？」

「そうだね。お風呂入ってすぐ寝れば大丈夫かな」

「うん。分かった。じゃあ先に桜入れちゃうね？」

「うん」

「というわけで、桜入っていいよ」

あれ？　桜さんと一緒に入らないんだ。
それだと1～2時間は後になりそうだな。
女性のお風呂って長いし。

「そう。雪は？」

「私は信君と入るから」

そっか。信と入るのか。

「ふ～ん。分かったわ」

……あれ？

「……ん？　信と入る？」

「うん。私は信君と入るよ」

「ゆ、雪姉！？」

「雪！？　何言ってんのよ！」

「あれ？　変なこと言った？」

「もしかしていつも一緒に入ってるの！？」

「入ってないよ！　いつも一緒に入ってるように言わないでよ！」

「あれ？　入らないの？」

「信！　どういうことよ！」

「ちょっっまって！　知らない！　いつも一人で入ってるよ！」

「じゃあなんで雪はクビ傾げてるのよ！」

「ゆ、雪姉！？」

「うん？　だってお風呂の中で倒れたら危ないよ？　だから今日は一緒に入るんだよ」

「ちょ、ダメ！　ダメだよ！」

「そうよ！　信の言うとおりダメよ！　信は私と入るんだから！」

「さ、桜さん！？」

「桜、ダメだよ？　わがまま言うと信君困っちゃうよ？」

「雪姉も言ってるからね！？」

「むぅ～。信君こんな時ぐらい一緒に入っちゃだめ？」

「雪！　私が一緒に入るわ！」

「桜は黙ってて！　信君。お姉ちゃんは風邪なのに甘えてくれないから甘えて欲しかったり、桜が居るせいでいつもより甘えられなくて寂しかったりしてるわけで、純粋にお風呂で倒れないか心配だから一緒に入るんだよ」

「今の動機ってほとんど不純だよね！？　はぁ～2人とも一緒に入ってきてください。このままじゃ時間の無駄なんで」

「信君……だめ？」

「はぁ、そうね。雪、入るわよ」

「ふぇ～。は～ぃ」

はぁ、やっと入ってた。

つ、疲れた。
ああいうのはせめて桜さんが居ない時にして欲しいよなぁ。
それだったら俺だって……って入らないよ！
うん！　入らないから！
はぁ～もう少しのんびりしたいなぁ。

「さて、そろそろ寝ようと思うのだけど私どこで寝ればいいかしら？」

お風呂上りの桜さん。
名前の様に桜色に火照った感じが色っぽい。

「桜は私の部屋使っていいよ～」

それに負けず劣らず可愛い雪姉。
いつも見てるはずだけど一向に慣れないのは雪姉が可愛いのがいけないと思う。

「ふ～ん。で、雪は信と一緒ってわけ？」

「うん。そうだよ～」

まぁ、雪姉はいつもだしね。

「ずるい」

「ふぇ？　でもでも～信君のお布団に3人は狭いよ～」

「でもずるい」
はぁ。言うと思ってたけどね。
なんか2人も3人も変わんない気がしてきた。
「雪姉。良いんじゃない。一緒でも」
「信君？」
「それより早く寝よ？」
えぇ、このときの俺はすごく浅はかでした。
どうしてかって？
それは……
「ね、眠れない」
左には腕を抱きしめながら寝る雪姉。
柔らかくて温かくていい匂いで落ち着くのにドキドキするいつもの慣れたようで慣れない感じ。
寝息が首筋に当たるのもむず痒くてくすぐったい。
これだけならいつものように理性と戦って戦いつかれて眠るのだが……。
今日は右側がある。いや居る。
雪姉に対抗するように右腕を抱えて眠る桜さん。
雪姉とは違った柔らかさに温かさ。
ほのかに香る匂いも俺の理性をガリガリ削り取る。
そして時折絡む足とか、えぇ、俺の心拍数はもう異常を通り越してる。
女の子が一人増えただけ？

あぁ俺はなんてバカだったのか。
１＋１なんて戦力じゃない！
掛け算だったんだよ！
え？　１×１＝１？
バカ野郎！
桜さんの戦力は１万だ！
そして雪姉は１００万だ！
それをかけたら分かるだろ！
え？　雪姉の方が強い？
…気のせいだよ？
うぅ、ドキドキして眠れないよ。
早く風邪薬の効果で眠くならないものか。
……もう少し理性が弱ければ楽だったのかな。
……想像したら雪姉と結婚してる想像しかできなかったぞ。
責任云々に発展してないだけマシだよね。
うん、きっとそうだよ。
はぁ、早く眠気が訪れますように。

～～雪視点～～
今日は信君が風邪をひいちゃった。
私の体調管理が確りできてなかった所為だよね。
反省しないと。
でも、昔のプロポーズのこと思い出してくれたのは嬉しかったな。
少し恥ずかしかったけど。
夏樹君と桜が来たのは予想外だったよ。
うぅ～せっかくの２人きりで一日過ごせると思ったのにぃ。
少し……すごく残念だよ～。
でも、お見舞いに来てくれるのは良いんだよ。
信君も嬉しそうだったし。

そ、それに信君が夢に見るほど私を思ってくれてるのも分かったし。
そのあとはぎゅって抱きしめてもらっちゃったし。
えへへへ、温かかったなぁ～。
それは良かったんだけど…桜が泊まったのは良くないよ～。
せっかく信君にはたっぷり甘えてもらおうと思ってたのに～。
タオルで背中を拭いてあげたりご飯を食べさせてあげたりお風呂入れたあげたり色々してあげたかったのに。
予定が全部狂っちゃった。
きっと桜は風邪で疲れてるから私の事を抑えようなんて考えてたんじゃないかな？
桜も暴走するのに……。
うぅ…今日はいっぱい信君に迷惑かけちゃったかな？
嫌われてないかな？
明日は今日の失敗を全部取り戻すようにがんばろ。
そうと決まれば今日は早く寝よう。
大好きだよ。
私も大好きになってもらえるように頑張るからね。
おやすみ信君。
今日も信君はあったかいなぁ。

4日目～後編～（後書き）

気がつけばＰＶ５万、ユニーク２千……吃驚と嬉しさで飛び上がりました。
読者の皆様方本当にありがとうございます。

しかし皆様に一言…雪姉は私のです！（↑頭の悪い作者の妄言はスルーでお願いします）
雪姉可愛いですよね！
…えっ？　今回の桜の扱いがひどい？
ではでは、ここでネタバレを一つ…それもこれも全ては伏線です！
コンプレックス♪が完結した後、桜外伝ｏｒ桜編で今までの桜の気持ち等も載せていくので今しばらく桜は放置しといてください。

雪編は男視点の妄想１２０％の作品なら、桜は女視点の妄想作品に仕上げる予定です。
ですので、雪で砂糖を吐きながら桜を待っていて下さると作者は泣いて喜びます。

長々と失礼しましたが、これからも細々と頑張っていきますので温かい目で見守ってください。

元祖！コンプレックス♪　発掘されたプロローグ（前書き）

データクラッシュしたさいの破片データを発見したからさらしてみる。

コンプレックス♪の元になった話です。

元祖！コンプレックス♪　発掘されたプロローグ

「あんたって本当にブラコンよね～」

「え？　私？」

「そう！　美菜莉よ！　あんたブラコンにもほどがあるわよ」

「やだな～。私ブラコンじゃないよ～？」

「嘘言うな。まったく…自覚無しじゃない」

呆れた様にいってくる親友の香奈。
長い付き合いだけど、どうやら勘違いしているようだ。
私は決してブラコンじゃない。
だって私は……私は…

「私はブラコンじゃなくて唯命なんだよ」

「だ・か・ら！　それがブラコンなのよ！」

「私と唯は血の繋がらない兄弟だから結婚できるもん！」

「そういう問題じゃな～い！」

季節は春。
海守学園に新入生が入ってくる。

私はこのときこの瞬間を一年間も待ち続けていた。
だって、だって…
「入学おめでと〜！！！唯君！！！」
私の大事な、大事な、大事な唯君がこの学校に入ってくるから。
「ありがとう美菜姉」
真新しい制服に身を包み、気恥ずかしそうにしている唯が可愛くて可愛くてつい抱きしめてしまう。
「美菜姉、ちょ、ちょっと恥ずかしいよ…」
「あ、ご、ごめんね？　でも、唯君とこれから一緒だと思ったら嬉しくて」
「…僕も嬉しいよ！」
「唯君！　もうどうしてそんなに可愛いのよ〜！！！」
「わっ！」
照れて赤い顔を隠すために下をむく唯。
その様子がいじらしくてついつい抱きしめてしまう。
「ハァ〜…またやってるし…」
後ろから声がしたと思ったら親友の香奈がいた。
確り者で姉御肌の香奈は人気があり上級生からも可愛がられている。

本名は鈴木　香奈。
どこにでもいそうな名前だ。

「あっ！　お早うございます、香奈先輩」

「はいはい。おはよう。で、いつまで一年生の廊下で抱き合ってるの？」

「ずっと！」

「み、美菜姉～…それはだめだよ～。ちゃんと授業受けないと」

「大丈夫。唯君と一緒に受けるから」

「そっか。なら平気だね」

「うん。平気平気」

「…この姉にしてこの弟かぁ。ハァ～…これから大変だ……」

「ムッ！　唯君の悪口は香奈でも許さないよ！」

この世で大事な大事な唯君を侮辱するのは誰であろうと許さない！

「ハァ～。だ・か・ら！　いつまで廊下で抱き合ってるの！　ほら、みんな見てるんだからさっさと教室戻るよ！」

「あ～！！　いや～！　放して～！　唯君の所にいるの～！！」

「はいはい」

「首根っこ持って引きずらないで～。私はまだ唯君と居るの～！」
私と唯君の仲を引き裂くなんて。
唯君が遠ざかっていく～～～。
「ほら、恨めしそうな顔で何時までも見てない！　まったく、さっさと教室戻るよ」
……留年しようかな？
「あんた留年しようとか考えてない？」
「そ、そんなことあるよ？」
……しまった！　焦ってつい本音が！　というか、いつまで私を引きずって歩くのかな？　階段も引きずられると痛いんですが…。
「だ・め・よ！　そんなこと。唯君にも迷惑かかるわよ」
「そんなことないもん！」
香奈の目が光った…ちょっと怖いよ～。
「ふ～ん。なら、もし留年したとしたらクラスは？」
「唯君と一緒！」
「席は？」

「隣だよ！」

「席の間隔は空けるよね？」

「え？　なんで？　空けないよ～」

「…休み時間は？」

あれ？　香奈の表情が段々険しくなってる？

「唯君と過ごすよ」

「……お昼は？」

「唯君と一緒に私の手作りお弁当食べるの！」

「……ほ、放課後は？」

眉間に皺寄せてる…頭痛いのかな？

「一緒に帰るよ？　当然だよ！」

「あんた…ぜっっっったい留年禁止！！！」

「なっ！　横暴だよ！」

「横暴じゃない！　あんたが留年したら唯君…いえ、主に周りが迷惑よ！」

「ひど～い。　絶対留年するもん！」

”ぼそっ”

「唯君が悲しむよ？」

小声で呟いてたけど唯君絡みの話題は聞き逃す筈がない。その私の耳が”唯が悲しむ”と聞いた。それは絶対に絶対にしてはいけない事。ならば私のする事は一つ…。

「唯君が悲しむなら留年しないもん」

「……相変わらずね、あんた。私が思っているよりずっと重症だわ」

「病気じゃないもん。唯君が私の生きがいなだけだもん」

あっ！　今小さく溜息吐いた。ひどいよ、質問してきたのそっちなのに。

「先が思いやられるわ……」

それ私のセリフだもん！

〜〜設定〜〜

名前：琴坂（ことさか）　唯（ゆい）

年齢：１６才

身長／体重：１５６ｃｍ／４２ｋｇ

外見：短髪、痩せ型、可愛い

性格：押しに弱い、自分より他人を優先、人を見る目はある、溜め込む、

隠しているが甘えたがり
呼び方：みな姉、光、ほのかさ

名前：瀬野　美菜莉　（せの　みなり）
年齢：１７才
身長／体重：１６５ｃｍ／４４ｋｇ
外見：腰まである長髪、可愛い系の容姿、
性格：おっとり、弟命、天然、
呼び方：鈴唯、久野くん、芳月さん
その他：鈴唯ダー（弟レイダー）を持つ

元祖！コンプレックス♪　発掘されたプロローグ（後書き）

データ飛ぶと書く気って無くなりますよね？
そんな感じで書かなくなって、新しく書き出したのがコンプレックス♪だったりする。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3492n/

コンプレックス♪

2011年4月22日23時21分発行